寺島の歴史を探る

寺島自治会

「寺島の歴史を探る」冊子作成にあたって

寺島自治会長　大村　厚

ふっと立ち止まってみませんか

寺島の夏は、７月初旬の臨済宗奥山方広寺派西隠寺と大伝寺で、毎年行う遠州大念仏寺島組の若衆が舞う達唱で始まります。達唱とは、新盆の前に、先人たちの霊を念仏供養する庶民信仰の行事です。残念ながら、昨年と今年は、コロナ過でほとんどの行事が中止となりました。

こんな時ですので、少し立ち止まって、寺島の先人たちが何を思い、何を考え、何を残したかを検証することも、今後の寺島のため、若い人たちにとってより住みやすい寺島にするために大切な事と思います。

そのきっかけとなる回覧「寺島の歴史を探る」をまとめ、冊子にしたいと考えていたところ、幸い、北浜南部協働センターの「令和３年度協働センターを核とした地域課題解決事業」として取り上げていただき、本冊子を作成することができました。是非活用いただきたいと思います。なお、冊子の印刷・製本には、地域の方々の協力がありました。ここに感謝申し上げます。

執筆者　太田　隆雄

平成３０年１１月に行われた「寺島青少年育成会」総会の折、寺島の歴史の概要についてお話させていただきました。それをきっかけに、私が調査してきた寺島の歴史について皆さんに知っていただきたいと願い､毎月１回ずつ回覧という形でお知らせしてきました。３年５ヶ月で「その３４」まで続けることができましたが、今回の事業において、冊子にまとめていただけることになり、大変有り難く思います。

ぜひ改めてお読みいただき、これからの寺島、子供たちのために役立たせていただければ、うれしい限りです。昭和３０年の「北浜村だより」にこんな言葉がありました。

「みんなの仕事　郷土研究は　ふる里発展の土台石」

今後も､多くの方々が寺島の歴史に関心を持ち､探究していただきたいと願っています。

協力いただいた地域の方々

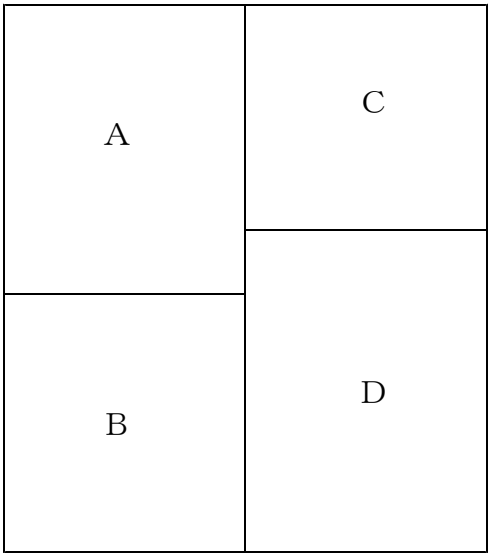
１０－１班　袴田茂彌　　２３班　石神孝治　　若草３班　高橋　公

「寺島の歴史を探る」一覧

No.	年　月　日	題　名	
その１	平成３０．１１．２９	寺島の歴史　概要	
２	令和　１．　６．１５	寺島の神社を訪ねて	
３	８．　１	寺島の寺院を訪ねて	
４	９．　１	寺島の学校の移り変わり	
５	１０．　１	寺島の移り変わりと寺島の小字	
６	１１．　１	寺島の秋葉山常夜燈・龍燈と秋葉信仰	
７	１２．　１	寺島の半僧坊道と里程石	
８	２．　１．　１	庚申講(庚申當)とお日待ち	
９	２．　１	寺島の馬頭観音を巡る	
１０	３．　１	寺島の馬渕春涛翁と渥美知新翁	
１１	４．　１	伝統をつなぐ遠州大念仏寺島組	
１２	５．　１	発明家「機具久さ」こと水野久平	
１３	６．　１	国指定天然記念物「庄園の松」	
１４	７．　１	疫病除けの神「牛頭様」	
１５	８．　１	寺島の金融「無尽講」と「二六信用銀行	
１６	９．　１	新四国八十八か所８８番札所「大伝寺」	
１７	１０．　１	天明の大騒動　１・２	
１８	１１．　１	寺島の蔵・倉を巡る	
１９	１２．　１	寺島を含む美島村合併・分離紛議	
２０	３．　１．　１	西隠寺の中興　十八世頑翁石和尚	
２１	２．　１	寺島の江戸時代の領主	
２２	３．　１	寺島の古文書２点を紹介	
２３	４．　１	寺島と寺島周辺の伝説	
２４	５．　１	寺島３か村の村絵図(１)	
２５	６．　１	寺島３か村の村絵図(２)	
２６	７．　１	西隠寺の供養塔と大伝寺の供養像	
２７	８．　１	寺島の大工　彦五郎	

No.	年　月　日	題　名	
２８	９．　１	松島十湖門下の俳人たち	
２９	１０．　１	寺島の寺子屋手本	
３０	１１．　１	明治時代の地券と寺島全村地図	
３１	１２．　１	青山忠俊と小林・寺島	
３２	令和　４．　１．　１	寺島領主の陣屋を巡る	
３３	２．　１	江戸～明治時代の資料等を紹介	
３４	３．　１	遠州織物の歴史	

＊本冊子の発刊にあたり、これまでの回覧の内容の一部に修正と追加をしてあります。



【表紙の写真】

令和２年度　　浜松地域遺産認定（認定文化財）

A　　新四国八十八か所８８番　弘法大師像（大伝寺）

平成３０年度　浜松地域遺産認定（認定文化財）

B　　椿薬師如来像（西隠寺）

C　　寺島の道祖神

D　　山王の秋葉山常夜灯

回覧

平成３０年１１月２９日
作成　寺島７班　太田隆雄

「寺島の歴史を探る」その１

１１月２４日（土）に行われた「寺島青少年育成会」総会の折，寺島の歴史の概要についてお話をしましたが，ご参加いただけなかった方々にも関心をもっていただければ有り難いと思い，その内容をまとめましたので，お読みください。少し修正をいたしました。
今後も，寺島の歴史についてお知らせする予定です。

（１）「寺島」の名前の由来は？

○土地の様子を見ると　　＜Ｐ６川跡図を参照＞
・天竜川が多くの川筋に分かれ氾濫を繰り返していた。
・**天竜川の流れによって，神明宮付近から幼稚園付近までを中心に微高地（島のように砂礫がたまった少し高い所）ができた。打上も「打ち上がり村」とも呼ばれたようで，同じように土地が高くなった所といわれる。**
・小字名に川・水に関わる名がある……**間渡**（川の岸から岸へ渡る所）
土居上・土居下（川の堤になっている所）
清水（澄んだ水が湧く所）

○寺のことについては
・**「遠江国風土記伝」**内山真龍（またつ）著　（江戸時代の大谷村庄屋）に書かれている。
「かつて聞く，この地（寺島）**は昔寺宇十五坊ありき，今は薬師堂・弥陀堂を見るのみ」**（巻五１７９２）
「およそ寺島・寺町を号す地は寺跡なり」（巻二１７８９）

⇒２２０年前に，真龍は，寺島には寺が多くあったという言い伝えを聞き，寺島という名の土地は寺跡であると述べている。

・小字名に寺に関係する名だけ残っている。　「喜泉庵」「多門寺」「込堂」

⇒以上のことなどから，「寺島」は，文字通り「寺（坊）が多くあった島状の村」に由来していると考えられる。

（２）寺島３村（寺島村・寺島新田村・打上村）はいつできて，どう変わった？

○平安時代中頃まで（１０００年以上前）

・神明宮近く（寺島の**宮東遺跡**）で，小さな土器片（**須恵器①**）がごくわずか見つかっている。
・寺島の地域は、遠江国長上郡（ながのかみのこおり）に属している。

○平安時代中頃～　　（１０００年前頃～）

・天竜川の本流が寺島より東へ移ると，寺島付近も開発が進められたと思われる。
・開発領主の寄進により，油一色・美薗辺りから天王辺りまで寺島を含む５００町歩の地域は，**美薗御厨（みそのみくりや）**という伊勢神宮の荘園となり，米や特産品を上納していた。（９００年前頃～５００年前頃）
・伊勢神宮の祭神を勧請し，美薗御厨を守護する神社を建てた。
　それが**寺島の神明宮でないか**と推定されている。外宮と内宮があった。

○鎌倉時代～　（８００年前頃～）

・**鎌倉時代の山茶碗②**（日常雑器）などが，神明宮のまわりから多く発見されている。（**寺島の宮東遺跡**）
・鎌倉時代に大伝寺が開創，南北朝時代に西隠寺が開創されている。
　この頃から寺（坊）がいくつか建てられてきたのではないかと思われる。
・妙教寺も釈迦堂として戦国時代に創立されている。
・**寺島の天神遺跡**（本田１０班付近）では，戦国～江戸時代の土器片が見つかっている。

⇒　開発が進み，**集落で人々が暮らしていた証拠。**室町・戦国時代の頃には，美園御厨の荘園は崩壊したが、その地域は**美園庄とよばれた。その中に寺島と呼ばれる村もあったと思われる**が，村名が分かる文書等は見つかっていない。

①

１３００～１２００年前頃の須恵器

②

８００～７００年前頃の山茶碗

○江戸時代（４００年前頃～）（１６０３～１８６８）

・初めて 寺島村 の名が文書に見える。
　関ヶ原の戦いの翌年，**慶長６年（１６０１）**の松平忠頼領郷村帳に村名がある。

・すでに寺島村の周りの開発（新しい田畑を作る）が進んでいたが，江戸時代に一層開発が進んだ。
　元和５年（１６１９）の秋鹿文書に**「同所新田」とあり，寺島村の分地となっている。**

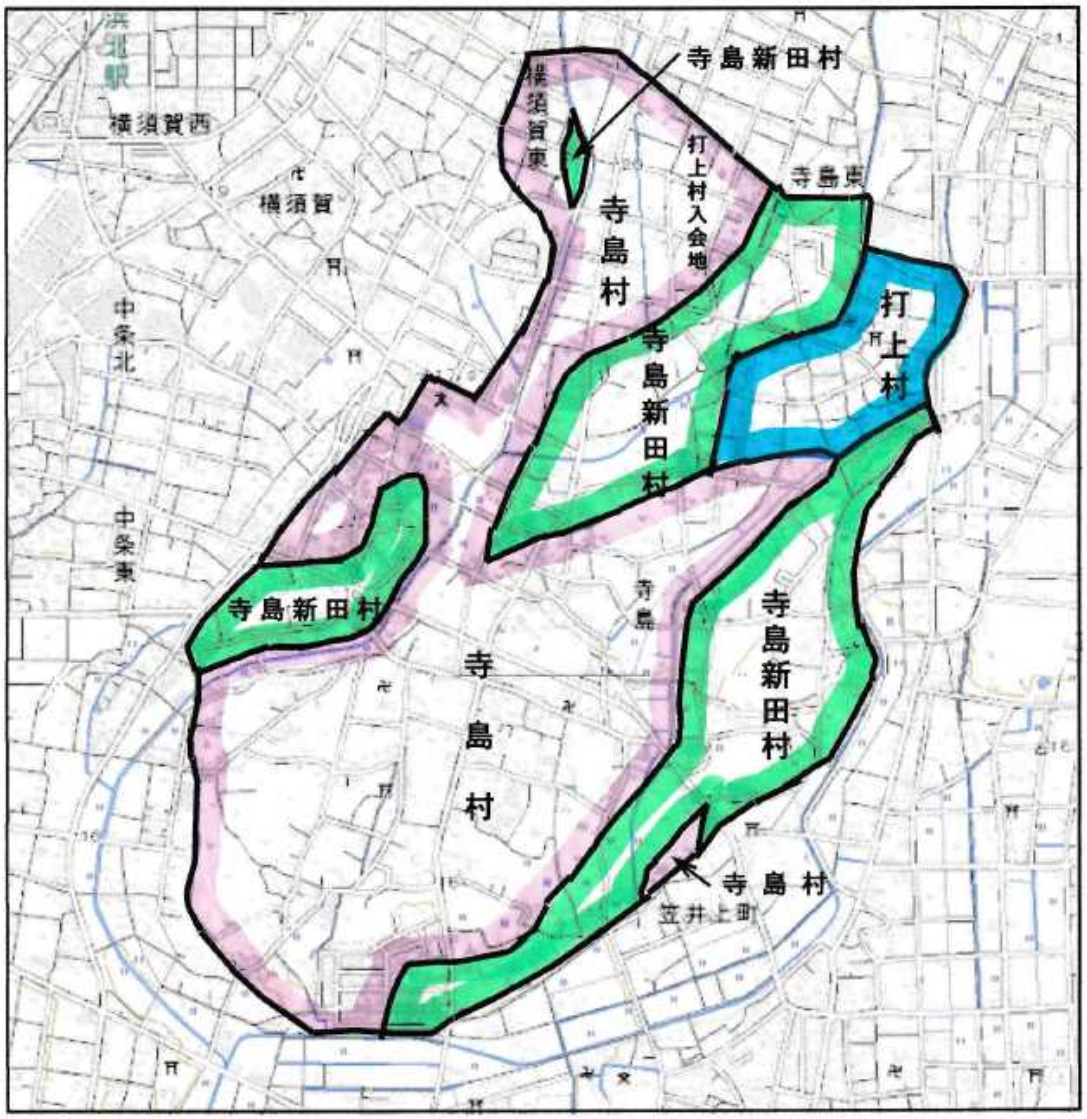
　その後 寺島新田村 が**分村**した。（北新田・東新田・山王付近）
　寛永３（１６２６）の浅井長四郎朝正宛て文書に村名がある。

・天正年中・慶安年中（１６４８～５１）の小天竜の締め切り工事、延宝３年（１６７５）彦助堤により、流れが少なくなり，さらに開発が進んだ。

打上村 が分村した。（寺島東）　「打上（うちあが）り村」とも書かれている
寛文１２年（１６７２）の古文書に「打上村」の名が記されている。
延宝８年（１６８０）頃の青山御領分絵図に村名がある。

⇒　１６８０年頃までに今の寺島地域（３村）のもとができたと言える。
３村は，その後，明治９年（１８７６）まで約２００年続いた。

○寺島三村のおよその地域　（太田作成）



国土地理院電子地形図（タイル）を使用

・３村とも耕地は畑が多く，田はごく少なかった。（畑方の村と言われた）

・年貢は米や畑作物などを換金して納めた。（金納）
（川跡だった東新田などの田は，主に明治初め頃に開墾されたようだ。
砂利を積み上げた山が最近までいくつもあった。）

・江戸時代の寺島３村の領主は

大名領　　１８年間　　・浜松城主松平忠頼、遠江・駿河国主徳川頼宣
　慶長６(1601)年～

幕府直轄領　８４年間　　・代官秋鹿氏，市野氏など
　元和５(1619)～

旗本領　　１６５年間　　…寺島村・打上村は，五井松平氏
　元禄１６(1703)年頃～　　…**寺島新田村**は，五井松平氏と北条氏の相給，
　　その後，五井松平氏と松平氏との相給

＊相給……　一つの村を複数の領主が分割して支配していること

○明治以降　（１５０年前～）

・**明治９年　寺島村・寺島新田村・打上村の３村が合併　寺島村**となる。
・寺島村～**美島村**～**北浜村**（浜名郡の北部）～浜北町　～浜北市～浜松市
　　（明２２）　（明４１・昭２６）　　（昭３１）（昭３８）（平１７）
・昭和４８年　**若草団地**が造成される。

（３）寺島の路傍の文化財　＜Ｐ６地図参照＞

○龍燈・秋葉山常夜燈　（６ヶ所）

・秋葉山　火伏せの神を祀る。
・江戸時代中頃（３００年程前頃）から信仰が盛んになった。
・村などで講をつくり，費用を積み立て，毎年代参をし，お札をいただいて来る。龍燈にお札を納めたり，家内にお札を貼ったりして火事を防ぎ，村の安全と家内の繁栄を願った。
・秋葉山への道や辻に常夜燈が建てられ，毎晩明かりを灯し，秋葉参りの道しるべとした。
・現在は毎年１月２８日（近い日曜日）に供物をあげて祭を行い，もち投げなどをしている。

○馬頭観音　（５ヶ所）

・昔は家業のために馬を飼い，大切に育てていた。
・亡くなった馬の供養のために，馬頭観音を建て祈った。

○半僧坊里程石　（４ヶ所）

・明治時代に，奥山の方広寺が火事になったが，鎮守の半僧坊だけ類焼を免れた。
　それにより，半僧坊が霊験あらたかな神として信仰を集めた。
・半僧坊へ向かう道（半僧坊道）には，里程石（道のりを示す）がいくつも建てられた。
　笠井～小松へ向かう道もその一つ。　→

西隠寺北の里程石
「五里十五丁」

○道祖神　＜Ｐ５　寺島の文化財を参照＞

★寺島の文化財３点（平成３０年度　市認定文化財）を紹介します。

浜松市では，地域の身近な歴史・文化遺産を大切にし，後世に伝えるため，浜松地域遺産を認定し，登録しています。（通称　認定文化財）
寺島自治会の推薦で３点を登録申請し，認定されました。

○寺島の道祖神

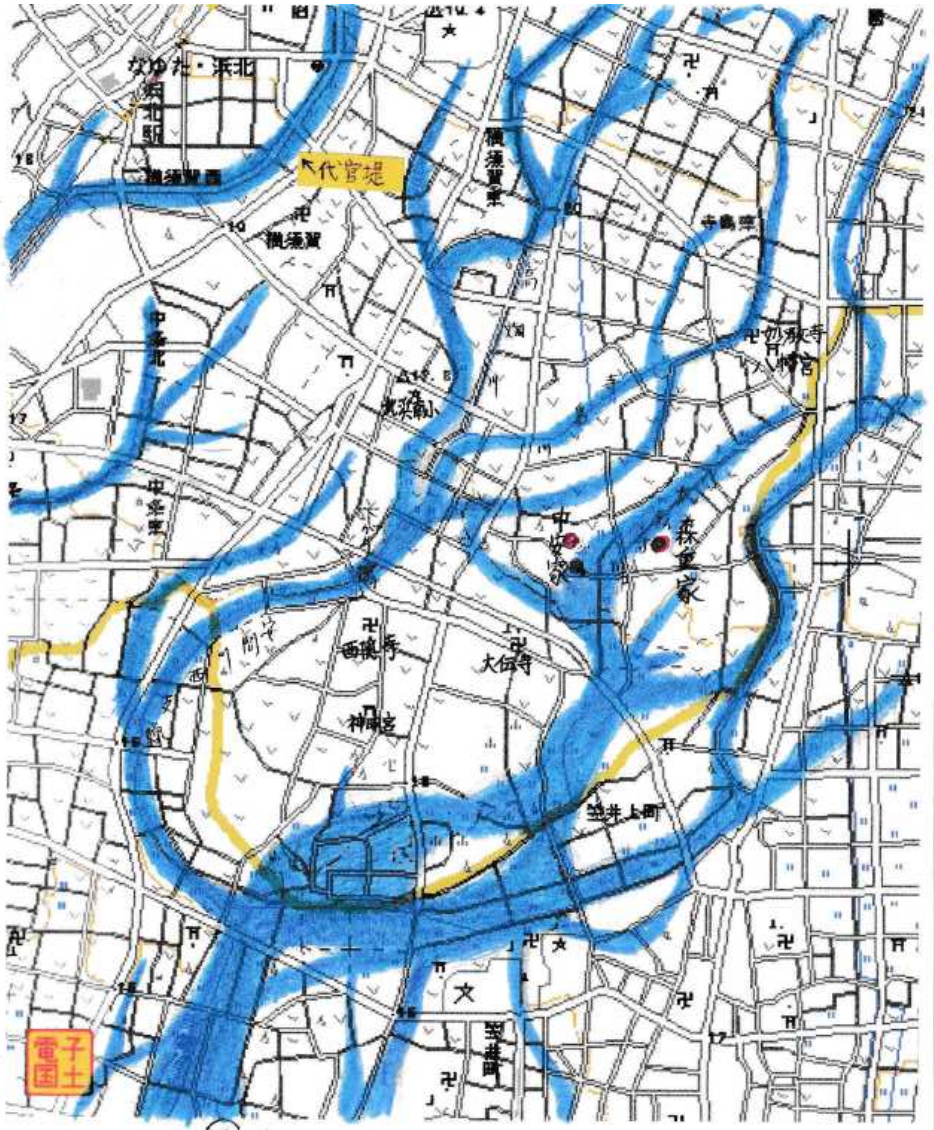
砂岩で風化が進んでいるが，舟形に彫られた中に２体の像が肩と腕を組むような姿が浮き彫りされている。**村の魔除けや行路の安全**を守るため，さらに**子孫繁栄**を願うため建てられた。
建立年月は不明。
道標を兼ね，向かって左面に「左平口不どう」と刻まれる。右面は現在判読不能であるが，「右宮口」と刻まれていたという。平口不動道と宮口庚申道の分岐点（清水の三叉路）に祀られたものである。
現在は大伝寺門前にある。浜北区ではこの道祖神と赤佐の道祖神の２基のみと言われる。

○山王の秋葉山常夜燈

龍燈内にある秋葉山常夜燈で，「秋葉山夜燈」「**明和五年**戊子霜月吉祥日」（１７６８）「寺嶋村郷中」と刻まれている。
浜北区内で古い秋葉山常夜燈（明和５年建立）３基の内の一つで，保存状態が大変良い。
道路拡張に伴い，２度移転し現在地に建てられている。昭和２０年代までは地区で毎夕ろうそくで灯火を行っていた。祭典は毎年１月２８日に近い日曜日に幟を立て行っている。
龍燈内に嘗て使われた「あきは山」と記された灯明箱がある。

○椿薬師如来石像・同脇立像　（西隠寺）

境内お堂の厨子内に安置されている。内山真龍の遠江国風土記伝第五（１７９２）に「西隠寺持ち、椿一株を霊木と為す、御體は石なり」と記されている。
天保時代の村絵図には，旧公会堂の地に「薬師」とあり，元はその地にあったと推定できる。
薬師如来は薬壺（やっこ）を持つ。病を治し，寿命を延ばす御利益の仏である。
脇像の背面に**「東光山薬師佛　黙源建之」**の銘が見つかった。**約３００年前**の江戸時代元禄～宝永（１７００年前後）の**西隠寺９世黙源然住職**の建立と思われる。
堂脇に霊木の椿がある。堂前に安政６年（１８５９）に内野村の横田保兵衛實久（さねひさ）（後の横田保）が奉納した常夜燈一対が建ち，宝暦５年（１７７５）に寺島新田村の花井理兵（衛）が奉納した手水鉢がある。



国土地理院 土地条件図をもとに作成
（太田）

寺島周辺の河川の跡図

寺島の路傍の文化財
（太田作成）

令和元年６月１５日

回覧　「寺島の歴史を探る」その２　　作成　寺島７班　太田隆雄

寺島の神社を訪ねて

現在の寺島には，寺島東（打上）を含むと，２つの神社と３つの寺院があります。寺島の名のごとく，ずっと以前には寺が多くあったのではないかと言われています。

また，江戸時代にはいくつもの大小の神社がありました。明治時代初めに，太政官布告により社格が付与されるようになりましたが、村社に指定されない小社が合併整理され，合祀されました。

江戸時代
寺島三村

○寺島村（６社）
- 神明社（内宮）・神明社（外宮）
- 山王権現（日吉神社）・天神社
- 牛頭天王（八坂神社）・八幡宮

明治７年合祀　神明宮　→　明治１２年村社

○寺島新田村　浅間神社　大正４年神明宮に合祀

○打上村　八幡宮（妙教寺の鎮守であったが，分離）

明治９年合併し，寺島村となる。

合祀前の神社

国土地理院
電子地形図
（タイル）
を使用

裏面もご覧ください

○神明宮　（詳細は、「神明会館完成記念誌」にあり）

・主祭神　天照大神　（内宮）

・由緒　平安時代（約９００年前）に寺島を含む油一色・美薗から天王地域まで，**美薗御厨（みくりや）**とよばれる伊勢神宮の領地となった。御厨の神明宮として伊勢神宮より勧請された神社と推定され，内宮・外宮が存在している。

・江戸時代　朱印５石６斗の寄進を受けた。北新田の花井家（文右衛門）が代々神官を務めた。

・祭礼　９月１４・１５日（近い土・日曜日）

・昭和３７年　本殿建て替え　３８年　拝殿建て替え　神明造り

・合祀社

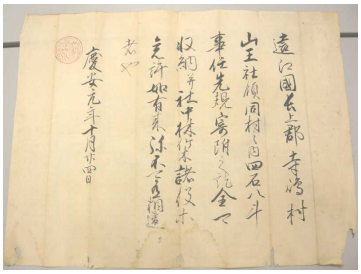
神明社（**外宮**）	**字富永**より	豊受姫命（食物・穀物を司る神）
八坂神社（牛頭天王）	字八坂	須佐男命（疫病を司る神）
日吉神社（山王権現）	字山王	大山咋命（日枝山の神）
天神社	字天神	菅原道真（学問の神）
八幡宮	字八幡	誉田別命（八幡神）
浅間神社	字北新田	大山祇命・木花咲屋姫命（富士山の神）

＊合祀後に**「外宮は字富永」と記録**されているが，**合祀前は，内宮は字富永に**あった。

＊古老の言い伝えとして，字富永にあった神明社を**「富永様」**とよび，美薗の富永氏が毎年１月１日の暁に参拝したという。富永氏は神明内外両社を祀った人ではないかという。

（明治８年各村取り纏め帳）

山王権現社跡（字山王）



将軍家光の朱印状写し（袴田氏所蔵）

○山王権現社（日吉神社）跡

・山王の袴田家（多左衛門）が神官を務めた。

・江戸時代　朱印４石８斗の寄進を受けた。家光から９代の将軍の朱印状写しが残されている。

天神社跡（字天神）

浅間神社跡（字北新田）

牛頭天王跡（字八坂）

八幡宮跡（字八幡）

神明社内宮跡（字富永）

八幡宮（打上）荘園の松　天然記念物
昭和５６年伐採　樹齢３８５年

令和元年８月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その３　　作成　寺島７班　太田隆雄

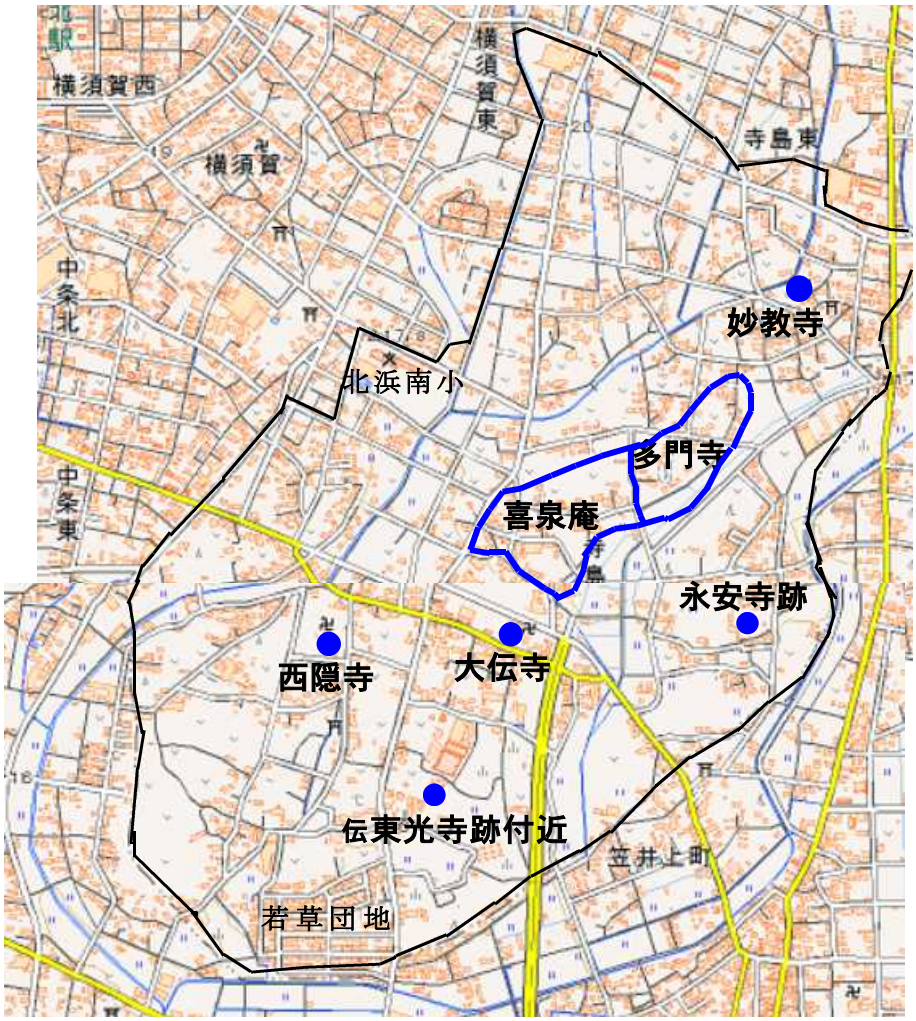
寺島の寺院を訪ねて

現在，寺島には３つの寺院あります。しかし，ずっと以前には寺島の名のごとく，多くの寺院があった島状の村であったと言われています。寺院は，天竜川やその支流の氾濫に対して，寺院を守るために少しでも高い場所に建てられたと思われます。それで、島状の寺島には寺や坊が多く集まったものと思われます。

現在の**西隠寺，大伝寺，妙教寺**のほか，大正時代まで東新田に**永安寺**がありました。また，いつ頃までか不明ですが，南崎には**東光寺**もあったと言われています。

さらに，字名をみると，東新田と北新田の間には，**多門寺**や**喜泉庵**があり，寺院に関わる字名と考えられます。

今回は，それぞれの寺院や廃寺となった寺院について，主な点について紹介します。



国土地理院電子地形図（タイル）を使用

○松源山西隠寺（しょうげんざんせいいんじ）

・臨済宗方広寺派の寺院
・南北朝時代の永徳元年（１３８１）奥山三生院二世**暘谷玄輝（ようこくげんき）**和尚が開山
・本尊は釈迦牟尼仏
・江戸時代に朱印６石２斗の寄進を受けた

・明治１８年　火災で焼失，　　１９年　本堂再建
・平成２７年　本堂建て替え，　２９年　落慶式
・現在　２３世　山上之瑛住職

・１８世原田頑翁（がんおう）和尚

原田氏宅庭には，１９世石翁が頑翁の事績を刻した墓がある。

頑翁は，住職となって質素に務め励むこと十数年，西隠寺を中興。徳が高く人望があり，明治元年，天皇より高僧に下賜する紫衣を賜った。明治９年８月７日示寂

・椿薬師如来像　（Ｈ３０市認定文化財）

遠江国風土記伝（１７９２）に**「西隠寺持ち，椿一株を霊木となす，御體は石なり」**と記され，また天保時代の村絵図には旧公会堂の地に**「薬師」**と記されている。元は旧公会堂の地にあったと推定される。両像は薬壺（やっこ）を持つ。病を治し，寿命を延ばす御利益の仏である。新田村の花井氏が手水鉢を寄進している。

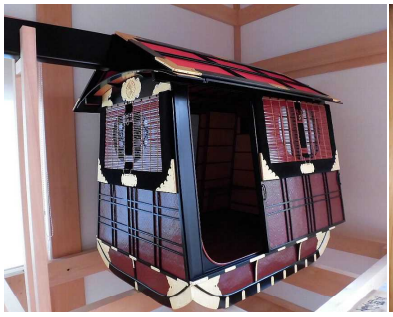
脇像の背面に**「東光山薬師仏　黙（もくげん）源建之」**の銘が見つかった。約３００年前の元禄～正徳時代（１７００年前後）頃の**西隠寺９世黙源然和尚の建立。**

椿薬師前の常夜燈は，安政６年，内野村の横田保兵衛實久（後の横田保）が寄進した。

・摩利支尊天

大正１４年に百年祭が行われたことから，**文政８年（１８２５）頃祀られた**と思われる。常にその形を隠し，障難を除き利益を与える神で，西隠寺の鎮守である。かつては御嶽教の祈祷，昭和十年代まで火渡りの信心をしたという。

摩利支尊天前の常夜燈は，内野村の横田豊興・吉右が寄進した。



・住職の乗物駕篭

住職が奥山への往復に使用した。乗物駕篭を修復した折，駕篭内から２枚の札が発見され，札には**安政３年（１８５６）「下都田村吉景　塗師（ぬし）屋佐五郎」**が作製したと記されていた。駕篭は宗安寺役寮宛てになっていることから，後に頑翁が宗安寺から譲り受けたのではと思われる。

○長冨山大伝寺（ちょうふざんだいでんじ）

・臨済宗方広寺派の寺院
・開山は鎌倉時代の宝治２（１２４８）年，**法燈圓明国師**（ほうとうえんみょうこくし）大和尚（臨済宗法燈派の祖）で阿弥陀堂として開創。
文禄２（１５９３）年，８世寶岩（ほうがん）和尚の時，方広寺末となる。
・本尊　阿弥陀如来（厨子内，百年に一度開帳される）
・江戸時代　朱印３石５斗の寄進を受けた。
・明治３５年　現在の本堂が建築された。　　・現在　２３世池貝弘禅住職

・**聖観音と西国三十三観音**
境内の聖観音は再建されているが，台座に「**大般若経真読満願　西国三十三處聚□供養之尊像**」「**宝暦十二**」（１７６２）とあり、１５世「**空萬谷**（くうまんこく）」和尚が大般若経６００巻を真読（しんどく）し，西国三十三観音を集めて供養したことが記されている。像は１６世「**龍水蓮**」和尚が建立した。文政５（１８２２）の夜燈帳にも聖観音や西国三十三観音が境内にあることが記載されている。
現在，本堂内にある西国三十三観音は，当時のものかは不明だが，元は境内の観音堂にあり，昭和４６年に本堂内に移されている。

・**大師堂**
弘法大師像台座に「**四国八十八番　世話人　宇右衛門　弥平次**」と刻まれる。
弘法大師ゆかりの四国霊場参りになぞらえたもので，大伝寺は，**文化１３年（１８１６）頃**から始まった浜松市内の寺々による**新四国八十八ヶ所参り**の**八十八番札所で**あった。
近くには，５番中条安楽寺，３０番笠井法永寺，５６番小松上竜寺（紹隆寺），７６番万斛甘露寺などがあり，大師像も現存する。

・**知新（ちしん）翁句碑**
中善地村（現豊西町）の俳人松島十湖の門人で，寺島の４人の一人，**温古堂　知新（渥美代助）**は，大正１１年宗匠となり，弟子を指導した。知新の死後，昭和３０年，十湖門人など１２名により句碑が建立された。
「すらすらと　月は昇りて　水の中　　知新居士」
と刻まれる。

・**水野久平（きゅうへい）の碑**
江戸時代，笠井市場は木綿の取引がされ，明治十年代には笠井縞から遠州織物が発展。明治２０年，久平は笠井に来て，**織物の研究，改良，発明考案により，遠州織物の品質向上発展に寄与**。通称「機具久さ（はたくぎゅう）」と呼ばれた。昭和９年３月，高柳遠市等８名の弟子たちにより碑が建てられた。

○圓詔山妙教寺（えんしょうざんみょうきょうじ）

・日蓮宗の寺院で，天正元（１５７３）創立，釈迦堂と号す。
・開基は，元和元（１６１５）長光山妙恩寺１２世了雲院**日登（にっとう）上人**　　・現在　３９世山本観栄住職
・長光山妙恩寺末
・本尊　日蓮聖人
（日蓮宗の**寺紋が井桁と橘**であるのは，日蓮聖人が井伊氏の分家貫名（ぬきな）氏の出であることからという。）

鬼子母神

・**子安鬼子母神**（安産・子育て）と**鬼形鬼子母神**（病気平癒）が本堂内に祀られる。子安鬼子母神は，懐に稚児を抱き右手にザクロを持つ女神で，女性たちの信仰を集めた。

・**七面堂**　（平成２７年改築）
境内に**七面大明神**（七面天女とも）法華経を守護する神を祀る。１・３・５・９月８・１９日祭典
北辰妙見大菩薩・日朝上人も祀る
・境内には，男女の縁が切れないという**ナギの木**がある。

・妙教寺の南側の**八幡宮（祭神誉田別命（ほんだわけのみこと））**は，元は妙教寺の鎮守八幡大菩薩社であった。明治初めに神仏分離により分離した。
八幡宮境内に，**「明神松」**とも言われていた国の天然記念物**「庄園の松」**があった。昭和５６年，松食い虫の被害で伐採された。樹齢３８５年，関ヶ原の合戦前には芽吹いていた。
掘り出された根が**「松霊明神」**として境内に祀られている。また，切り株の標本が，浜北文化センターに展示されている。
←（「浜北市の文化財」より）

○永安寺跡

・東新田にあった真言宗の**修験道寺院**で，檀家は持たない。創建は不明だが，江戸時代終り頃にはあった。大正１０年頃，台風のため本堂が倒壊し，廃寺となった。
・最後の住職　石神寛三郎氏（良寛）
・江戸時代終わりから明治中頃にかけて，修験者である**全学院良慶**が，村内の様々な祭祀や祈祷を行い，永安寺住職を務めていた。間渡の旧龍燈や東新田牛頭様の棟札にも良慶の名がある。

○伝東光寺跡

大村氏の旧宅がかつて伸東工業の南付近（南崎）にあり，紺染め屋を営んでいた。その付近にかつて「東光寺」があり，いつか無くなったが，大村氏宅が東光寺の所ということで，いつの間にか「東光寺」と呼ばれるようになったのではないかという。そして明治の末に火災のため，現在地に転居した後も**「東光寺」という屋号**で露天商をしていたという。（大村紀代さんの話より）

○多門寺跡？

東新田の森重繁清氏の田の下から，宝篋印塔（ほうきょういんとう）といわれる墓石片がいくつも掘り出され，祀られている。川跡である田のすぐ北側は**字多門寺**で，多門寺跡と思われる。川の氾濫で多門寺が流されたか，明治初めの廃仏毀釈等の混乱で古い墓石も棄てられたのではないかと想像する。字多門寺と字喜泉庵は一続きの広い寺院跡かと推定される。

令和元年９月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その４　　作成　寺島７班　太田隆雄

寺島の学校の移り変わり

江戸時代には子供たちは寺子屋で習い事をしましたが,明治５年に政府が学制を頒布し,学校での教育が始まりました。今から１４７年前です。

寺島でも明治７年に，木舟新田学校寺島分校が，大伝寺を教場として設立され，明治４１年横須賀に北浜尋常小学校が設置されるまで，３４年間寺島の地に学校がありました。

太平洋戦争後の昭和２２年，新学校教育制度が制定されるまでの学校の移り変わりと，「木舟新田学校寺島分校」「寺島学校」「寺島尋常小学校」の設立の様子等を紹介します。

（参考「寺島尋常小学校沿革史」）

〇学校の移り変わり

年	月	事　　項
明治　５	８	学制が頒布される
６	７	木舟新田学校が長泉寺に開校　　高畑分校・横須賀分校・平口分校が設置される　（入学金２５銭　月謝１２銭５厘） 下等小学（４年）・上等小学（４年）
７	１１	**木舟新田学校寺島分校が大伝寺に設置される**
９		寺島村・寺島新田村・打上村が合併し，寺島村となる
１０	３	**寺島学校として独立する（大伝寺）**
１５	１０	初等３年・中等３年・高等２年となる
１９		＜**尋常小学校（４年義務）**と高等小学校（４年）に分かれる＞
１９	４	**尋常愛育小学校寺島分校となる（４年義務）（大伝寺）**
２０	５	**東美薗尋常小学校寺島分校と改称される　（大伝寺）**
２１	１１	**元の寺島公会堂の地に校舎新築される　大伝寺より移転し授業**
２２	４	寺島村・横須賀村・中条村・高畑村・東美薗村・西美薗村・油一色村・本沢合村が合併し，美島村となる **美島尋常小学校寺島分校となる**
２５	７	**寺島尋常小学校として独立する**
３４		授業料廃止される
４１	１	美島村と平貴村の一部（貴布祢・沼・道本・小林）が合併し，北浜村となる
	９	**北浜尋常小学校（６年義務教育）が設置される**
４２	４	**北浜尋常高等小学校と改称される（高等科２年義務教育）**
４２～４５		横須賀に新校舎建設。その間，もとの各尋常小学校が仮校舎で，順次新校舎に収容される
昭和　２	３	**高等科が３年に延長**される
１６	４	**北浜村国民学校（初等科６年・高等科２年）と改称される**
２０	７～１０	空襲避難のため，初等科児童を分散して授業をする 寺島村内　１・２年　大伝寺８１人 ３・４年　妙教寺７３人 ５・６年　西隠寺１２５人
２２	４	新学校教育制度　北浜村立北浜小学校（６年）・中学校（３年）
２９	４	私立**北浜南託児所**が開設される
３３	４	私立北浜南託児所が浜北町立**北浜南幼稚園**に昇格する
５９	４	浜北市立**北浜南小学校**が分離開校する

○「木舟新田学校寺島分校」「寺島学校」

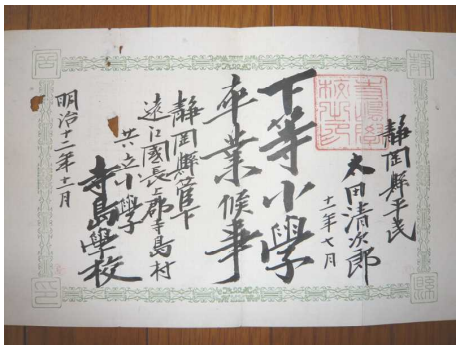
明治７年１１月に寺島分校が設立されましたが，校地・校舎の設備がなく，大伝寺を借用して教場とし，同庭を借用して運動場としました。

分校の設備や書籍は，寺島・寺島新田・打上の三村から徴収して購入しました。当初は十数脚を用意し，順次整い，明治１０年３月に独立した時は，三十余脚になりました。仏室の前に１４坪の教室が２室ありました。

授業料は，当初は毎月１２銭５厘を徴収し，入学金は２５銭を納めさせました。

生徒数は分かっていませんが，初めは下等小学（４年）の子供だけでした。就学する生徒が少なかったのは，子供も一家の働き手であり教育の必要性を感じない家庭が多く，また寺子屋の学費と比べ，非常に高いと思われたからでした。

分校が独立して「**寺島学校**」となった明治１０年頃より授業料や入学金を減らしたり，貧富に応じて区別したりして，明治１７年頃には，授業料は一人５銭から５厘まで区別，入学金は１０銭と６銭２厘５毛の２種にしました。



明治１２年寺島学校卒業証書

その後，校名が，**尋常愛育小学校寺島分校・東美薗尋常小学校寺島分校**と変わりながら，明治２１年１１月，元の公会堂の地に校舎が新築されるまで，１４年間，大伝寺で授業が行われました。

○「寺島尋常小学校」

明治２１年，寺島の元公会堂の場所に校舎が新築され，大伝寺より移転して授業が行われました。

そして，明治２２年美島村が誕生すると，美島尋常小学校寺島分校となり，明治２５年に独立し，寺島尋常小学校となりました。

「寺島尋常小学校沿革史」によると，校地は南北に長く６５９坪あり，校舎は東西に長く総坪数３５坪（２教室と職員控室など），その南側に約５００坪の運動場がありました。校舎は木造で白壁，その外側に板を張り，屋根は瓦葺きでした。建物内に大人用便所，外に子供用便所があり，校舎の北側に上から水面まで３間の井戸がありました。

授業料は明治２５年には，４学年は８銭，３学年は７銭，１・２学年は６銭でした。但し，一家に２人以上の場合は一人は半額でした。明治３４年に授業料は全廃されました。生徒数は不明です。

寺島尋常小学校は，明治４１年，北浜尋常小学校が設置されるまで続きました。

寺島尋常小学校があった場所

明治３０年寺島尋常小学校卒業証書

＜寺子屋の手本＞

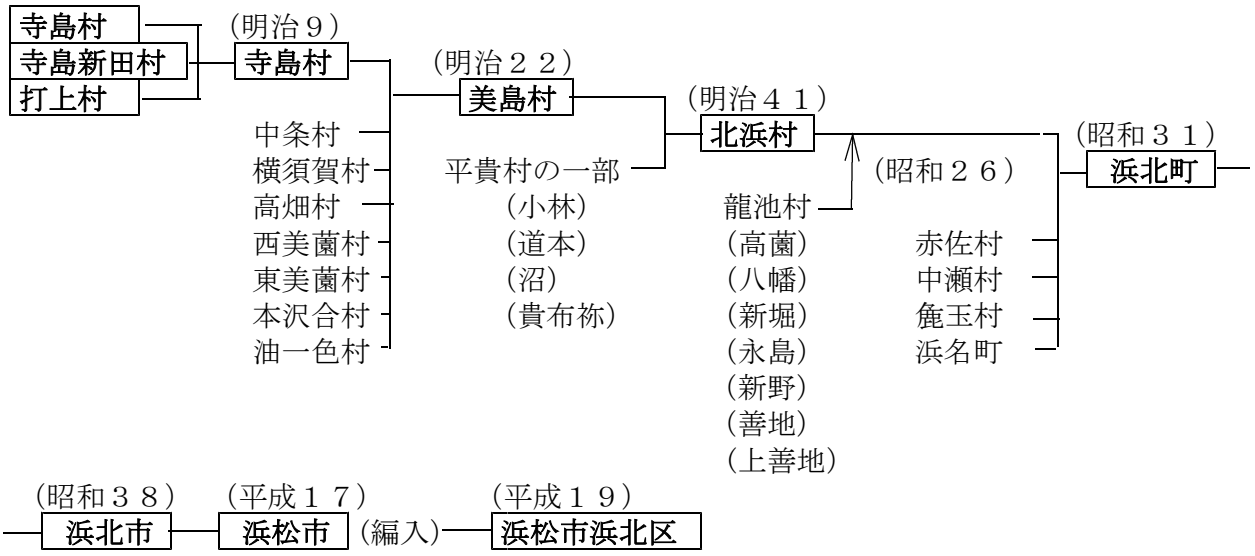
江戸時代終わり頃から，西隠寺の原田頑翁和尚に手習いを受けた子供の家に，頑翁の習字手本が残されている。「苗字人名の覚」には，人名のほか様々な職業・寺社・地名等も書かれ，習字の教材というのみならず，村の様子を把握させるようになっている。

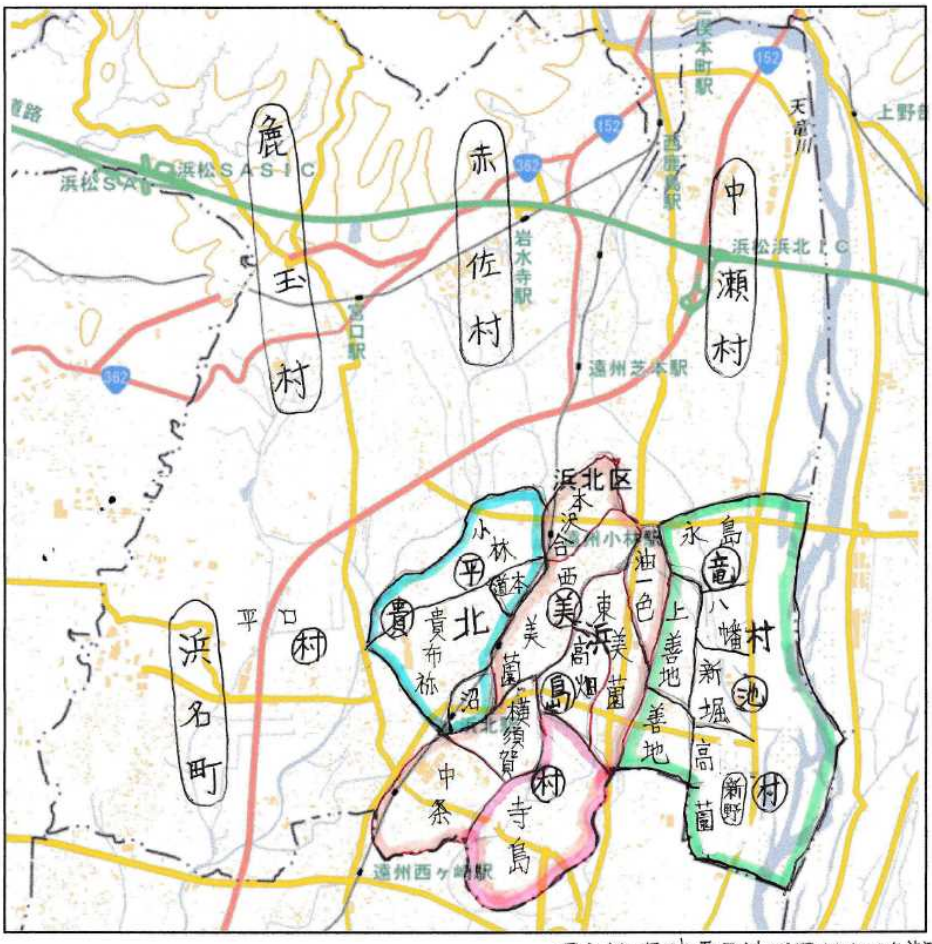
令和元年１０月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その５　　作成　７班　太田隆雄

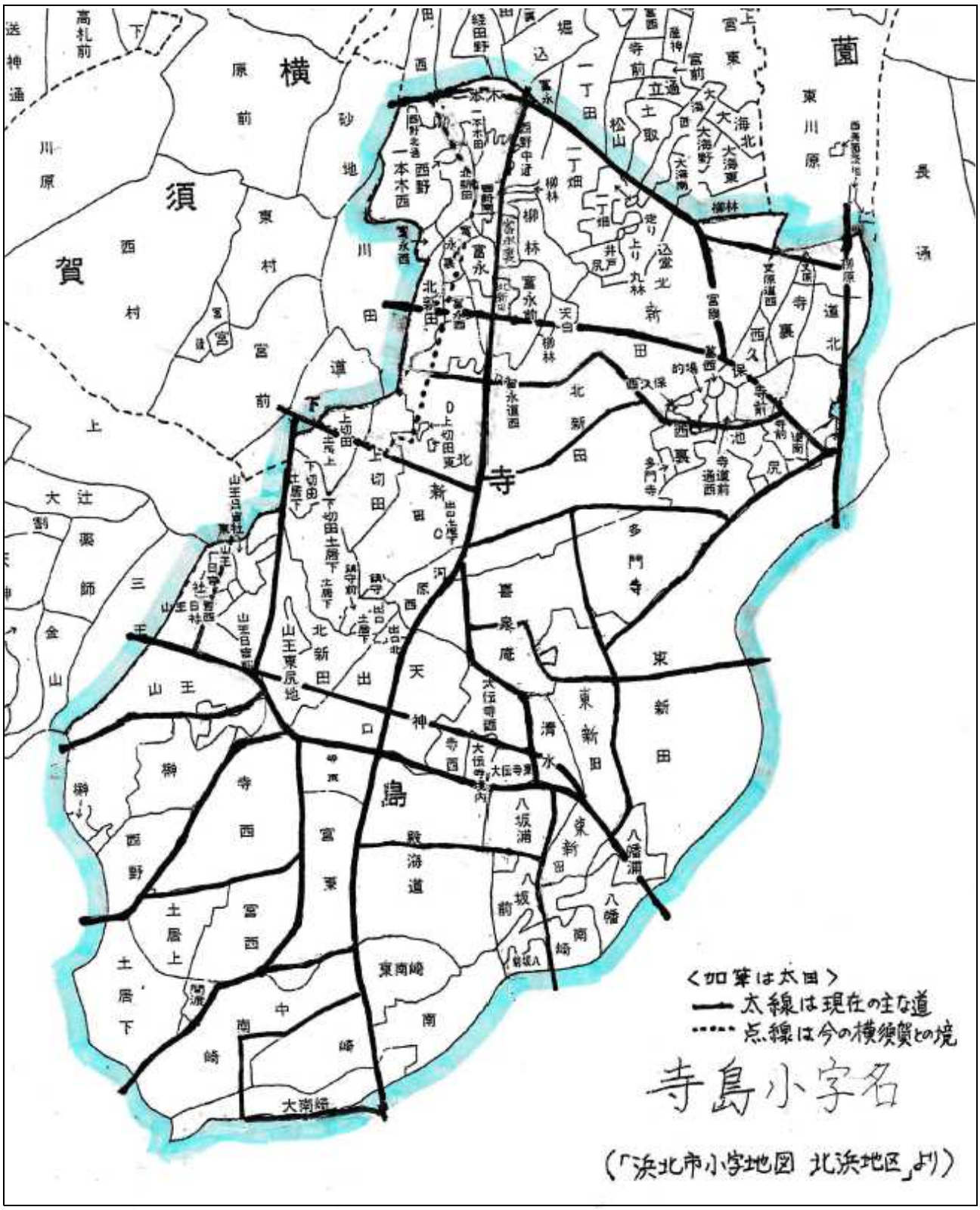
「寺島の移り変わり」と「寺島の小字（こあざ）」

土地の名前は，土地の様子や用途・いわれなどから名付けられ，土地の歴史を表しています。
寺島でも明治２２年以降には，「寺島村」の名はなくなりましたが，寺島は大字として現在まで残り，その一部の寺島新田（北新田・東新田）・打上の名も地区の名として残されています。また，その土地を表す小地名も小字として伝えられてきました。
今回は，寺島村から浜松市までの移り変わりと寺島内の小字を紹介します。





国土地理院電子地形図（タイル）を使用


横
須
賀
寺
島
<加筆は太田>
太線は現在の主な道
点線は今の横須賀との境
寺島小字名
(「浜北市小字地図 北浜地区」より)

令和元年１１月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その６　作成　７班　太田隆雄

寺島の秋葉山常夜燈･龍燈と秋葉信仰

寺島地区内には、秋葉山常夜燈や龍燈が６カ所建てられています。常夜燈を雨風から保護する鞘堂（さやどう）を浜北地区では「龍燈」と呼んでいます。現在では、龍燈の中に秋葉山常夜燈が残されていない所が多いですが、**山王の龍燈**には石造りの常夜燈、**間渡・門前の龍燈**には瓦造りの常夜燈が残されています。

龍燈という呼び名のいわれは、諸説あります。天竜川との関係から、龍神・水神信仰から発生したともいわれています。常夜燈のことを立燈と書いた古文書もあります。

江戸時代の中頃より、秋葉山の火伏せ（火事を防ぐ）の神を崇敬することにより、村の安全と家内の繁栄を願う信仰が盛んになりました。村では講という組織をつくり、代表者が秋葉山へ参詣し、お札をいただいて来て、各家に祀るなどしました。また、秋葉山に通じる秋葉道や村の辻には常夜燈が建てられました。

江戸時代の終わり頃になると、雨覆いの鞘堂（龍燈）が作られるようになり、次第に彫刻が入り、組物も手のこんだ建物となりました。

明治時代になると養蚕業の好景気で、上島新田組など豪華な龍燈が建てられました。その後、常夜燈や龍燈は、道路拡張などによって移転され、秋葉道の道しるべとしての性格が失われるようになりました。また、龍燈は秋葉山の札を納め祀る所にもなりました。

秋葉山常夜燈には、昔から隣保で当番が毎日灯明やろうそくを灯していましたが、次第に電灯や蛍光灯に変わっていきました。山王や間渡・門前の龍燈の中に、灯明を灯すための灯明箱が残されています。

現在は、毎年１月２８日に近い日曜日に、当番により幟を立て、お祭りをして餅投げなどが行われています。

〇山王の龍燈・秋葉山常夜燈

もと内山氏宅角付近にあり。

昭和３年・昭和６３年移転建立

・秋葉山常夜燈（市認定文化財）

「明和五年戊子（つちのえね）霜月吉祥日」（１７６８）

「秋葉山夜燈」「寺嶋村郷中」

浜北区内最も古い常夜灯３基の内の１つ

（約２５０年前）

・灯明箱（山王龍燈内）

扉に**「あきは山」**の文字の形に小さな穴をあけている。

側面・裏面に日・月・星の形に穴をあけている

○北新田の龍燈

・文政１３年の棟札があったという
　昭和３２年建立
　平成２年建立
・常夜灯(灯籠）はないが、瓦製の灯篭の台のみ残されている。

○東新田の龍燈

・もと永安寺境内にあり明治初め移転
　平成４年建立
・常夜灯（灯籠）はなし
・左手の祠は**「牛頭様」**

○清水の秋葉山常夜灯

「秋葉山」「郷中安全」
「明治三十七年八月」
・中安家文書に建設関係文書が残されている。
・平成１８年１２月改築

○本田の秋葉山常夜灯

もと山下商店の所にあった
「秋葉山常夜燈」「郷中安全」「明治廿年十一月建立
寺嶋村」「濱松紺屋町石工佐藤善三郎」と刻まれている。

○間渡の龍燈

・**瓦製の常夜灯**（浜北区では３基が残る）
・**天保１３年（１８４２）の龍燈の棟札が残されている。**
　「奉造立秋葉山龍燈一宇
　天下泰平國土安全
　天保十三年寅正月吉日
　工匠小栗政吉」
　「法主　全学院良慶」
（良慶は東新田の永安寺住職・修験）
・昭和３８年神明宮東入口付近より移転し建立。棟札あり。

天保１３年の棟札

・**灯明箱と灯明皿**（間渡の龍燈内）
　扉に**「秋葉神社　村中安全」**　明治時代以降のもの
　灯明箱は家々に順に廻し，毎晩当番の家では灯明皿に灯明をつけ，秋葉山常夜灯に明かりを灯したものと思われる。

令和元年１２月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その７　　作成　７班　太田隆雄

寺島の半僧坊道と里程石

北区引佐町奥山に、臨済宗方広寺派大本山の**方広寺**があります。「深奥山（じんのうざん）方広萬寿禅寺」といいます。寺島の西隠寺や大伝寺の本山です。方広寺は、後醍醐天皇の皇子、**無文元選禅師**（むもんげんせん）が井伊氏の一族奥山六郎次郎朝藤（ともふじ）の招きを受けて、建徳２年（１３７１）に開創しました。

方広寺には、**鎮守の神様である奥山半僧坊大権現**が祀られる半僧坊真殿があります。**明治１４年**の大火で方広寺が焼けましたが、**半僧坊は類焼を免れた**ところから、たちまち優れた霊験があると、広く信仰を集めるようになり、多くの参詣者が訪れました。火災消除・厄難消滅・海上安全等の御利益があるといわれています。

各地から半僧坊へ参詣に向かう人々が通る道を**「半僧坊道」**といい、道筋はいくつもあり、その内、**笠井から寺島を通る道筋が２つ（小松ルート・西ヶ崎ルート）**あります。

明治１６年に天竜川の池田橋や豊田橋が開通したことと合わせて、参詣者の便を図るため引佐・麁玉郡長であった松島吉平（十湖）が音頭取りとなって各地に**里程石（町石とも）**を建立したといいます。明治１０年代後半に多数建てられました。寺島付近でも有志によって里程石が建てられました。**奥山半僧坊までの道のり（○里○町）**が刻まれています。

寺島には４基の里程石が残されています。半僧坊道の道筋と里程石を紹介します。

（国土地理院電子地形図（タイル）を使用）

①　「五里十五丁」　（約２１．７ｋｍ）
「寺島村袴田□□
袴田□□
□□□□」（３名の名）
（袴田重一氏宅角）
＊ほぼ全体が残されている。

②　「□□□四丁」（五里十四丁か）
左側に「（半）僧坊」右側に「（岩）水（寺）」か？ わずかに判読できる。側面は不明
（現在は袴田誠二氏宅北東角に移されている）
＊もと袴田誠二氏宅前の旧道角にあった。
＊現在ブロックに囲まれ、ほぼ全体が残されている。文字が半分ほど欠損している。

③　「□□□二丁」（五里十二丁か）
「大村武平　中安吉平」

（市川正昭氏宅前）
＊上部が欠損している。
＊ごみ集積所の後ろに置かれていたものを建て直した。

④　「五里十□」　「右□口（くち）平□　左半僧坊」
「明治十八年三月□」

（現在は袴田三男氏宅庭に移されている）
＊道標を兼ねている。下部が欠損している。
＊もと笠井から西ヶ崎を通る道筋にあった。
（若草団地南端の交差点東、袴田氏の田の角）

＜付け足し＞　地図⑤

⑤　笠井上町の笠井街道から西に小松へ向かう道の交差点角に、かつて道標が２基ありました。
法永寺に移転後、さらに豊西町の「十湖百句塚」の入り口に移されています。
１基には　「左半僧坊道」「明治十五年八月建之」と刻まれています。（写真右の道標）

令和２年１月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その８　　作成　７班　太田隆雄

「庚申講(庚申當)」と「お日待」

数十年前ころまで、寺島でも庚申講やお日待の行事が隣保で行われていました。**庚申講**のことを寺島地域では「**庚申トー**」とも呼び、７班では「**庚申當**」の字が当てられています。年に数回、当番の家に夕方から集まり、神仏に礼拝した後、飲食や団らんをして過ごし夜遅くに解散しました。隣保の付き合いを深め、かつ楽しみの機会となったようです。

元々「庚申講」や「お日待」は、どのようなものだったのか探ってみたいと思います。

＜庚申講(庚申當)＞

寺島の門前組（５班）には、庚申當に使われた祭具が残されています。門前組では５０年位前まで、年に数回、**庚申様の掛け軸**を掲げ、小鉢に塩、米を入れ、酒を供えて拝み、会食をして夜１０時ころまでに解散しました。昼は近所の子供たちを呼んで食べ物を振る舞いました。その後、行事がなくなり、親睦会の旅行に変わったそうです。庚申様の祭具だけは班長が持ち回りをしています。

↑庚申寺発行の掛け軸

庚申様は、**青面金剛**といい、**大威力があり病魔や災難を除く仏**で、顔の色が青い金剛童子です。赤い三眼の忿怒の姿をしています。掛け軸には**申**にちなんだ**三猿**や夜明けを告げる**鶏**も書かれています。

青面金剛は庚申信仰の本尊として祀られました。**宮口の庚申寺**は、庚申信仰の遠州地方の拠点となっています。

（明治３３年の祭具箱）

庚申信仰は、中国から平安時代に渡来した道教の教えから生まれたといいます。「人には生まれた時から体の中に「**三尸の虫**」が住み、**６０日に一回庚申（かのえさる）の日**に、人が眠っている間に天に昇り、その人の悪行を天の神に知らせる。それにより天の神は、その人の命を縮める。」というものです。そのため、人は**その日は眠らないで夜明けを待つ**ことになったのです。庚申講は「庚申待」とも言われています。室町時代から庶民の信仰と娯楽を兼ねた農村の共同体の行事となり、飲食を共にする楽しみの機会となりました。病を除き命を延ばす庚申様はまた**農民の神様**と言われ、五穀豊穣を祈る所もありました。

＜寺島東の庚申講＞

寺島東の庚申講は、当番の持ち回りで昭和５０年代まで行われていました。青面金剛像の掛け軸を掛け、ろうそく、線香を立て、そば、うどん、山盛りご飯を供え、お経を唱え、鉦を鳴らして、夜１０時ころまで飲食しながら雑談をしました。昭和１０年ころまでは子供にも昼の食事を振る舞いました。初庚申の時は、しめ縄を玄関に付けました。庚申講は百姓の祭りと考えられていました。

（伎倍第９号「庚申信仰と宮口」（浜名高校史学部昭和５６年発行）より。浜北の庚申講について詳しく調査し、報告されています。）

＜庚申塔（こうしんとう）＞

庚申塔は３年で１８回の庚申講を終え、供養のために建てられることが多いようです。寺島にはありませんが、寺島近くの庚申塔２つを紹介します。

①橋爪の庚申塔

① **積志町の橋爪**の墓地内に庚申塔が建てられています。**笠のある八角柱の塔**で、正面に**青面金剛像と三猿**、各面に仏像が浮き彫りされています。三猿（見ざる・聞かざる・言わざる）は、庚申の申（さる）にちなんでいるといいます。

下部に「遠州長上郡」「橋爪□　**享保七年**霜月吉□」（１７７２）と刻まれています。（２４７年前）

②上善地の庚申塔

② 浜北区**上善地**の龍守院跡子安地蔵堂の横に、庚申塔が建てられています。正面に青面金剛童子像が浮き彫りにされ、**元禄１６年（１７０３）**建立、「上善地惣郷老若男女敬白」と刻まれています。（３１６年前）

この庚申様には、願をかける時に縄で縛り、願いが叶うと縄を解くという風習があるといいます。

＜お日待＞

浜北地域では、地区によって違いがありますが、昔は夕方当番の家に集まって、伊勢神宮や秋葉山などを拝んでから、食事を共にして夜通し過ごし、太陽が上がってから氏神にお参りしたり、太陽を拝んで解散したといいます。次第に、会食後、夜遅くには解散するようになりました。

正月、五月、九月、田植えや収穫が終わった時、特別のことがあった時にも行う所がありました。 南崎（７班）では、大正のころ、正月、四月、九月、十二月に行った記録があります。

「日待」は、本来は「まちごと」といって、**「神のおそばにいる」**という意味で、**神と共に夜を明かす**ことから、次第に**日の出を待つ**という意味になったといわれています。

令和２年２月１日

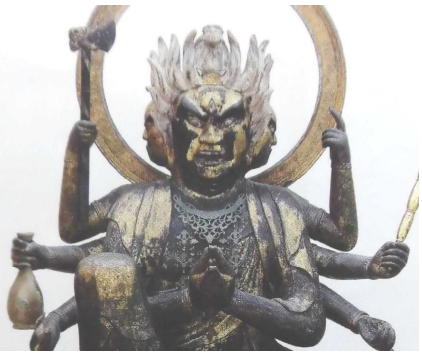
回覧

「寺島の歴史を探る」その９　　作成　７班　太田隆雄

寺島の馬頭観音を巡る

右の二つの写真は、細江町の長楽寺と市野町のお堂に祀られている馬頭観音です。

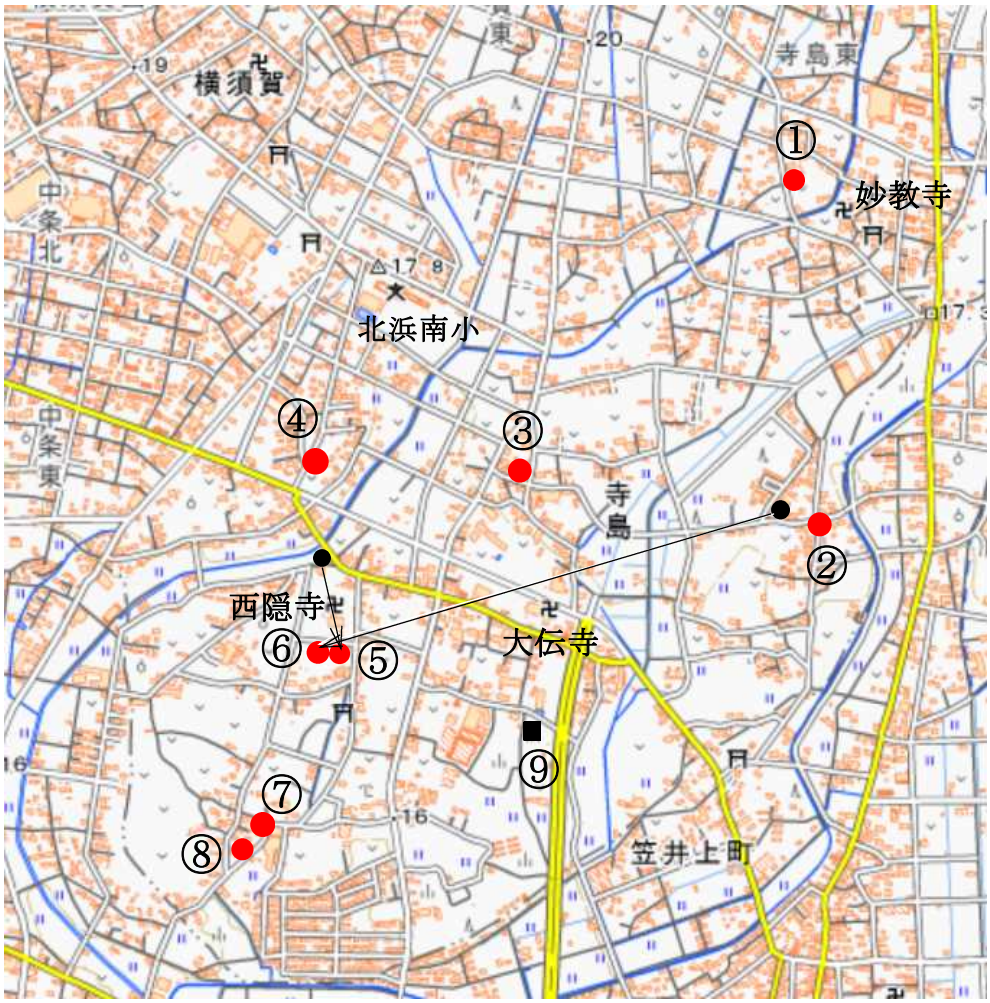
馬頭観音は六観音の一つで、写真のように忿怒の形相をし、頭の上に「馬頭」を載せている観音です。馬は草を食するように煩悩を食べ尽くすと考えられ、**観音の忿怒の姿と馬頭により諸悪を退け煩悩を断つ力がある**とされています。



細江町長楽寺の馬頭観音

市野町の馬頭観音

江戸時代以降には、民間では馬による荷運びや旅が行われ、馬は大切にされていました。そして「馬頭」の名称から馬頭観音は**馬を守る仏**として、また**旅の安全を守る仏**として信仰されました。また、馬が亡くなると、亡くなった路傍や馬を飼っていた土地に祀られ、供養されていました。さらに、馬のみならず、あらゆる家畜の安全と健康を祈り救うと言われています。



国土地理院電子地形図（タイル）を使用

寺島の各地でも、昔から石造りの馬頭観音が祀られています。馬頭観音ではないかと言われているものを含めて、８体を紹介します。

〈付け足し〉

⑨本田に安政６年建立の**地蔵菩薩**が祀られています。

①打上　石間進一氏宅前

大正７年、馬小屋から出火し、飼っていた競馬用の馬が亡くなったため、馬の供養と過難除けのため祀った。

②東新田　市川彰氏宅

明治時代に飼っていた馬が火事で亡くなり、供養のため祀られた。

もとは裏の道の北角に祀ってあった。

③清水　中安秋太郎氏宅前の角

旅人の馬が付近で亡くなり、供養のため祀られたという。風化が著しく、像の姿は、はっきりしない。

④山王　もと袴田菊治氏宅の屋敷跡

「馬頭観世音」と刻まれている。

昭和１６年か１７年、事故死した馬の供養のため祀られた。

⑤門前　西隠寺門前の石仏の一番左

もとは袴田正明氏宅の北の交差点にあったが、昭和２８年防火水槽が造られるときに移された。２つに割れていて修復されている。

⑥門前　西隠寺門前の石仏の一番右

もとは東新田の松島亘氏宅の西、空き地の西角に祀られていた。松島氏の先代の時にはすでにあったが、詳しいことは不明という。

⑦間渡　大城塗装の北東の角

馬頭観音ではないかというが不明。「為□念仏供養□」の文字が刻まれている。上部欠損。７０～８０年前にはあったという。

⑧間渡　中安朋之氏宅前の畑

曾祖父が馬を飼い、祖父の勝男氏は「馬勝っちゃ」と呼ばれ、馬の子を育てた。昭和１８年、馬の供養のために建立した。

令和２年３月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その１０　　作成　７班　太田隆雄

寺島の馬渕春涛翁と渥美知新翁

織姫図　（北浜中学校）

右は、かつて北浜中学校の講堂に掲げられていた**「織姫図」**の大きなタイル画の写真です。これは、寺島の画家**馬渕春涛翁**が描いた「織姫図」をタイル画として焼成したものです。

北浜中学校講堂は、同じく寺島の**中安忠一氏**の設計により昭和２７年８月２６日建築完成しました。その折、馬渕氏が中安氏に三ヶ日町の初衣神社に伝わる我が国最古と伝えられる織機の実測を依頼し、その図面を基に描きました。ちなみに最初の木造校舎も中安氏の設計です。

北浜地域は、江戸時代は畑作中心の農村でしたが、綿花や藍を広く栽培し、換金などして生活を支えてきました。そして、雨の日や冬には女性の仕事として機織りがされてきました。やがて工場制手工業として発展し、明治時代には遠州木綿の名を高めました。「織姫図」は当地にふさわしい図として掲げられたのです。現在は、北浜中学校南校舎の通路に移され、掲げられています。

春涛翁は、本名を寛、昭和３６年没(76歳)、山下青厓に学ぶ。日本画家竹内栖鳳の門人。

知新翁句碑　（大伝寺）

左の写真は、大伝寺境内に建てられている俳人**渥美知新翁**の句碑です。句碑には**「すらすらと　月は昇りて　水の中　知新居士」**と刻まれています。十湖門人等１２名により、昭和３０年１０月に建立されました。

知新翁の師である松島十湖は、１７歳で宗匠となり、多くの門人を育てました。引佐麁玉郡長など地方政治家としても活躍した人物です。

知新翁句碑には十湖の四天王、高井春雄・宮下以道などの名もあります。

知新翁は、大正１１年に宗匠になり、弟子を育てました。本名を代助、号は**温古堂・大叟庵**と称しました。昭和２７年没。知新翁の句碑は、他に豊西町御嶽神社境内の「百人一句塚」にもあり、**「初日にも　まさるおもひや　今日の月」**の句があります。

他にも同時代に活躍した寺島の俳人は、、**月洲・拙誠庵**(花井要一郎氏)、**習静・悟竹庵**(大村幸一郎氏)、**秋湖**(原田利三郎氏)、**涼水**(石神寛三郎氏)がいます。

「かかる度　露置袖や　月の雲」(月洲)　　「月雪も　詠し窓や　梅かをる」(習静)

「扇にも　のらぬかろみや　散さくら」(秋湖)

令和２年４月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その１１　　作成　７班　太田隆雄

伝統をつなぐ遠州大念仏寺島組

遠州大念仏寺島組

ご存じのように、７月（または８月）１３日から１５日に，祖先の霊を迎えて供養を捧げる「お盆」の習わしがあり，遠州地方の初盆の家々では，殊に華やかに祭壇を飾り，多くの人々が供養のために訪れます。そして，遠州大念仏が賑やかに勇壮の中にも厳粛に行われています。寺島では、７月にお盆の行事が行われています。

遠州大念仏は、庭で大念仏を１回行うことを**「一庭申す」**といい、低音でソフトな響きを持つ１尺６寸～８寸の**双盤**を用いることが，全国でも類を見ない特色です。

遠州大念仏のもとは，中世のころ一遍上人などが広め，三河・南信州から伝わった踊り念仏で，やがて農作物の害虫を避ける虫送りや雨乞いの行事と混じったり芸能色を強めたりしました。そして，初盆の供養として盛んになったものと考えられています。

由来の伝説として，三方原合戦での死者の供養のために，徳川家康が貞誉了傳（ていよりょうでん）（岡崎の大樹寺の僧）に命じて始められ，宗圓（そうえん）が継いだと伝えられています（他説もあります）。

江戸時代には各村で大いに盛んになり，約２８０ヶ村で行われていました。そして他の村の組と出会った時に喧嘩になることなどから禁止令がたびたび出されましたが，その中でも網の目をくぐって行われてきました。

明治になって廃物毀釈などで衰退の傾向の色が濃くなりましたが，昭和の初めには組織結成の動きが起こり，昭和５年**「遠州大念仏団」**が結成されました。戦時中は金属供出のため一時休止となり，戦後に復活しました。昭和４７年には、**浜松市無形民俗文化財**に指定され，**「遠州大念仏保存会」**と改称して，平成２９年には浜松市・袋井市・磐田市で６０組が活動していました。しかし、地域社会の変化や後継者の減少などにより一時休止の組が増え、平成３１年には活動している組は５３組と減少しています。

遠州大念仏保存会は平成２２年に統合８０周年、**本年は９０周年**を迎えます。（Ｐ２）

基本的な行列は，**「頭先（かしらさき）・頭（かしら）（びんどうろう）・幟・双盤・笛・摺鉦（すりしょう）・太鼓・供回り（かぁー）側・後押し」**が並び，道囃子の調子で引き手の案内により広庭に進み，左から右へ３回まわり，回向（えこう）隊形を作ります。

寺島組は，現在，「供回り（かぁー）側）」は「幟」の後ろに付き，「後押し」の役は行っていません。また，鳴り物の鈸（はち）を加えています。回る回数は２回です。

大念仏の中心となる回向は、基本の**３つの唱え（南無阿弥陀仏・歌枕（うたまくら）・二十字の称号）**を備え，静と動を配して構成されますが，各組独自の節，リズム，振りがあります。唱えの独唱・合唱は、聞き所です。歌枕は、供養の対象により異なります。また太鼓を打つことを太鼓切りと言います。

＊歌枕（寺島　親の場合）

「親様は今年初めて死出の山，もじの衣にしゅえ（朱柄）のから傘」

「から傘のいち（内）のろくろに鐘かけて申すね（念）仏は親のため」

＊二十字の称号（ふりがなは寺島の唱え）

「願以此功徳平等施一切
同発菩提心往生安楽国」

（願わくばこの功徳をもって一切平等に施し、
ほとけ心になり　往生安楽国へみな旅立つ）

供応を受けた場合は「お礼申し」の念仏があります。

＊お礼申しの唱え（寺島）

「ありがたや　これのお庭にお茶ひとつ
お茶のお礼に念仏一声」

回向が終わると流麗な立ち笛が鳴り，勇壮な囃子の太鼓切りの後、引き上げます。立ち笛と太鼓切りは聞き応え・見応えがあります。

また、寺島では余興におかめ・ひょっとこが加わり、滑稽に踊ります。

・寺島組の大念仏の特徴

「ゆっくりしたテンポ。ヨーナー部分は，**ゆっくり合掌で大きく円を描き，体でゆっくり三日月円を描く所作はこの組の特徴。**ヨーナーの後**リズムも振りが大きく形もいい。**歌枕ソロ部分前半，**静止部分があるので**ソロが映える。低音でソフトな尺８寸**双盤の響きに乗り，唱和は哀歌が漂い情緒がある。**」　（「平成１２年統合７０周年記念　遠州大念仏大競演」より）

・遠州大念仏寺島組の歴史

昭和５年遠州大念仏団結成時の副団長に寺島の石神昌胤氏，寺島組頭に花井彌吉氏。

戦後の復活後，昭和の終りには人員減少などから３年間一時休止となりましたが，地域住民の盛り上がりを受けて再編成，練習を重ね平成３年に復活しました。

組の復活と継続に長年努力された組頭太田昭一氏より，平成２５年組頭袴田黎二氏に継承され，平成３０年よりは組頭中安四郎氏に継承されました。現在、中高生・女性を含めて，５５名が活動しています。尚、袴田黎二氏は平成２９年より大念仏保存会本部役員（副会長）に任命されています。

＊遠州大念仏統合９０周年記念大会　　９月１３日（日）9:30~17:30　浜北文化センター

三河・南信州・遠州地域の念仏踊りについての講演と実演が行われる予定です。

今回は、**「和合の大念仏」**（長野県阿南町）・**新城の放下**（新城市）・**森町のかさんぼこ**（森町）の他、遠州大念仏保存会の数組の大念仏が披露されます。

令和２年５月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その１２　　作成　７班　太田隆雄

発明家「機具久さ」こと 水野久平

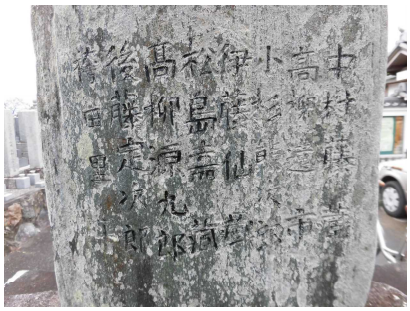
右の写真は、大伝寺境内に建てられている**「水野久平之碑」**です。

久平は、水野伊平氏の祖父で、明治時代に遠州織物が全国に知られるようになった頃、織機の多くの発明と改良を行い、また優れた弟子たちを育て、織物の産業発展に寄与した人物です。碑は、昭和９年３月、弟子の高柳遠市ら８名によって菩提寺の大伝寺に建てられました。

水野久平

久平は愛知県三河生まれで、２９歳の明治２０年に上村（笠井上町）に来住しました。職人気質の久平は、同年から徒弟を雇って、三河の手織りのチャンカラ機といわれる織機の製造を始め、その普及に務めました。

その後、明治３０年代には三重県から遠州に入った足踏み織機が製造されるようになり、金属の歯車で動く織機に改良するなど、**「機具久さ」**と呼ばれて親しまれたといいます。また、小笠郡平川村へ５年間出向いて住み込み、織機の製造や織物の指導をして村を助けました。


建立した８名の弟子たちの名

明治３7年に笠井に帰り、亡くなるまでの１３年間で織機や各種機具の発明改良により**特許９件、実用新案２３件を登録**し、当時遠州随一の偉業を残しています。それは様々な職業の人物との共同申請が多く､久平の影響を受けた人々が広くいたことを示しています。

発明活動が多忙となると、浜松の船越に別宅を構え、付近の諸工場と提携しつつ研究に没頭しました。

明治４０年代に動力織機が興隆し、「遠州製作」の前身で「鈴政式織機」の生みの親である鈴木政次郎の発明も、久平の指導の賜であり、「須山式織機」の中村義平にも大きな影響を与えました。福田別珍の主導者寺田市十も久平に指導を仰ぎ成功しました。

浜松の三大会社の一つ「日本形染」の技術顧問を務め、大正２年には、織物界の先駆者として遠江織物同業組合から感謝状を受けました。久平は生け花の師匠でもあり、金銭には淡白で大の酒好きでした。大正６年２月に５８歳で亡くなりました。

久平の一番弟子である高柳遠市は、中条の人で、独立して田町で織機を開発しました。織機は全国に出回り、遠市は各地で指導にあたりました。

（参考:「水野久平の半生」大野木吉兵衛著）

令和２年６月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その１３　　作成　７班　太田隆雄

国指定天然記念物「庄園の松」

寺島東(打上)の八幡宮の境内に、かつて偉容を誇った黒松の大木がありました。樹高２７ｍ、目の高さの幹回り約８ｍ、地上約７．５ｍの高さで２つの大きな枝に分かれ、東西３０ｍ・南北２８ｍの広さに枝を張っていました。**昭和１３年１２月１４日**、「庄園の松」の名で**国の天然記念物に指定**されました。

しかし、その後、松食い虫の被害があり、駆除などのいろいろ手当がされましたが、昭和５５年１１月に枯死しました。そして国の許可を受け、翌年２月１０・１１日に惜しまれながら伐り倒され、**昭和５６年５月１６日に指定が除解**されました。

庄園の松　（「浜北市の文化財」より）

この誇りの文化財を少しでも後世に残そうと、現在、境内に根の部分が保存されて、**松霊明神**として祀られ、浜北文化センターには標本が保存展示されています。他にも裏面の扁額や絵画のように、地元の人々が黒松の姿を大切に残しています。標本によると**樹齢は３８５年**、文禄４年(１５９５）ころ芽吹き、関ヶ原の戦いなどを経ながら、祖先と共に生き続けてきたのです。

松霊明神

元々、江戸時代には、八幡宮は妙教寺の鎮守八幡大菩薩社でしたが、明治の初めに分離しました。妙教寺には、**「七面大明神」（七面天女)**が祀られ、女の良縁、安産や子育ての霊験があるとして女性から広く信仰を集めていました。そのようなことから、八幡宮の松は、古くは**「明神松」**と呼ばれていました。

浜北文化センター内の標本

＊「明神松」・「七面大明神」の伝説

・昔のこと、南の羽鳥の庄と美薗の庄では、いつも境界について争いが起きていた。 ある年も争いが起こり、地頭が黒松を植え、この松を境にせよと命令していった。その松が明神松という。

・紀伊大納言光貞(紀州藩２代藩主）の妻、安之宮天真院が七面大明神を参拝した時、この松を大変褒めたという。

・安政の大地震の時、明神は天女の姿を現して、「気をつけなされ。気をつけなされ。」と、村の人々に危険を知らせに歩いたと言われている。

（遠州伝説集　第１５９話　御手洗清著などより）

明治・大正頃の松　（妙教寺と八幡宮は茅葺き）
（万斛　鈴木家所蔵写真）

庄園の松」の扁額　　寺島　三井　甫（はじめ）　氏
（庄園の松の一部を使用して制作）（八幡宮社務所内）

「庄園の松」の絵画　寺島　岸　擴（ひろむ）　氏

＊「庄園の松」の名について

今から１０００年程前の平安時代中頃からこの地域一帯（北は油一色・美薗辺りから南は天王辺りまで）は、**美薗御厨**（みそのみくりや）と呼ばれた伊勢神宮の荘園となり、産物などを献納していました。室町時代には武家に侵略され、荘園が廃された後も、この地域は**美園庄**といわれました。そのような理由で、「庄園の松」の名が付けられたと思われますが、その名は、美園庄と呼ばれた古い時代ではなく、ずっと後世になって付けられたようです。

ちなみに、大正時代の北浜村誌には、**「打上の名松」「壮観比（たぐい）なし」**と記されています。

＜参考＞　もう一つの庄園の松　「美園の松」

美薗御厨の中心であったと思われる美薗村（西美薗）には、一株の古い松の名木があると、江戸時代の書物に記されています。その後、天保年間には枯れてしまったようです。

・**「遠江国風土記伝」（１７９２）**

「西美園」「古松一株あり。俗に美園庄園の跡なりと曰（い）ふ。枝体屈曲し長者の儀に非ず」

・**「遠江古跡図絵」（１８０３）**

<u>美松山</u>多宝院（室町後期開創）の跡に**「美園の松」**があり、**「平松」**と呼ばれる。「美園村に名木の松有り。」「高さ三間余、四方広さ八間程、枝葉地に付て笠を伏せたる形なり。」「松根は二抱え程有りて、一本なれども三本に分かれたる様に見ゆ。」

美園之松　合本遠江古跡図絵より

＊元の多宝院は、江戸時代に焼失し、後に現在の場所に移転再建されました。西美薗には「平松」という小字があり、元の多宝院と平松があった所ではないかと言います。

令和２年７月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その１４　　作成　７班　太田隆雄

疫病除けの神「牛頭様」

①　裏　　表

神仙擁護　□□□□
（種子）　奉修牛頭天王供守護所
感應吉成　謹行之者　曰

文政十一龍集戊子　庄屋森重半兵衛
（種子）大願主　任往古姓名記世代
信心堅固如意之天
六月　祇園祭礼　當処新田
吉祥良日　氏子中

この写真は、寺島東新田の龍燈の隣に祀られている「**牛頭様**」(**牛頭天王**)です。

牛頭天王は、神仏混合の**疫病を司る神**で、これを丁寧に祀れば**疫病を除く**ことができるとされています。農作物や家畜の疫病除けの神でもあります。昔も今も疫病退散は人々の願いです。

牛頭様には、９枚の棟札が納められています。それによると、**古くは約２００年前、１８００年代初め頃から祀られていた**ことが分かります。最後の棟札は、昭和５０年１０月１９日再建となっています。

①は、**文政１１年(１８２８)の棟札**で、疫病が発生しやすいという旧暦６月に疫病神を鎮める祇園祭礼(御霊会)をしたことが書かれています。願主は庄屋の森重半兵衛と東新田の氏子たちです。他の棟札には、名主の市川儀左衛門の名もあります。

②　裏　　表

維時明治十四年　寺嶋東
奉遷宮牛頭天王組中安全爲衆病悉除
辛巳八月吉辰　組中

妙高山主　笠井村
（種子）法主　十三世　大工棟梁
法師良慶　条儀一郎藤原儀法
敬白

②は、**明治１４年の棟札**です。明治の初め、政府の命により神仏分離が行われ、牛頭天王の名も廃止され、同一視されていた素盞嗚之尊に変えられました。しかし、「牛頭様」は依然として牛頭天王の名を称しています。昭和１４年以後の棟札は、素盞嗚之尊の名に変わっています。

②の棟札の法主として、「**妙高山主十三世法師良慶**」の名があります。「良慶」は、**全学院良慶**という**修験者**で、江戸時代終わりから明治時代初め、村内の**祭祀や治病・除災の祈祷**に携わり、東新田の真言宗**永安寺**（修験道の寺）の**住職**(大正１０年頃廃寺)を務めていました。天保１３年（１８４２）の間渡龍燈の棟札にも、法主として良慶の名があります。(回覧その３、その６参照)　牛頭様のの他の棟札には、修験者の可学院慶昌の名もあります。

また、牛頭様の棟札には、寺島の大工と思われる渥美勝蔵（１８１４)、渥美政治（昭和１４年）などの名もあ

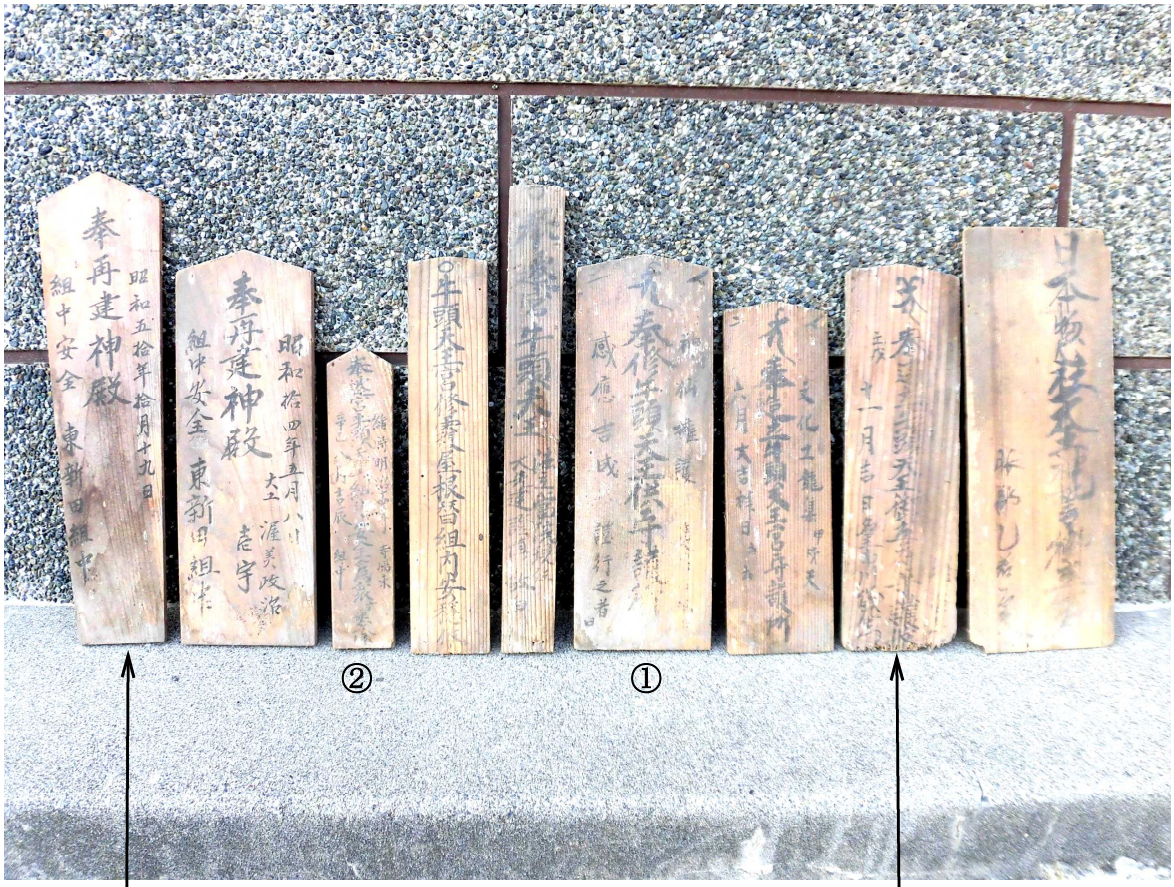
ります。昔から絶やさず、東新田の氏子たちが、疫病退散を願って社を再建し、素盞嗚之尊（すさのおのみこと）に変わってからも「牛頭様」と呼んで、お祀りを続けています。

現在、牛頭様は、１月終わりの秋葉山龍燈の祭礼と一緒に、東新田の当番が祭礼をし、餅投げをしています

ちなみに、江戸時代に寺島の字八坂（山中製作所の南）にも牛頭天王社がありました。明治時代の初め、名が八坂神社（素盞嗚之尊（すさのおのみこと））に変わり、明治７年に神明宮に合祀されました。神明宮にも疫病除けの神が祀られているのです。

疫病除けのために祀られた牛頭様（牛頭天王社）の棟札

（２００年程前から昭和５０年まで９枚の棟札が残されている）



最も新しい棟札（昭和５０年）　　最も古い棟札（壬戌１８０２年か）

＜参考＞

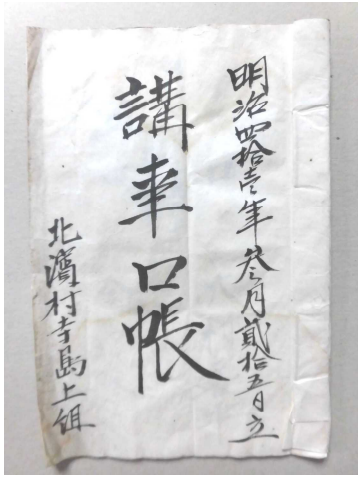
修験道は、平安時代末期に成立した宗教で、山を聖域と見、その聖域の奥深くまで分け入って修行することによって神秘的な力を得、その力によって自他の救済を目指す宗教です。明治５年に修験道が廃止され、修験者は僧侶になるか、神官になるか、帰俗するようになりました。

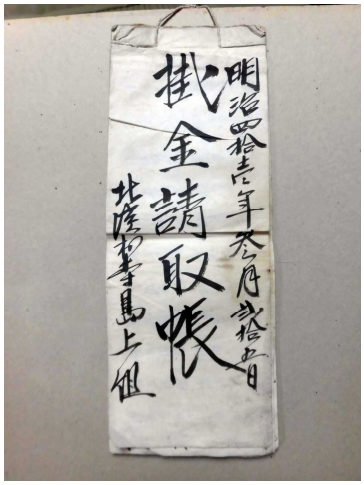
令和２年８月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その１５　　作成　７班　太田隆雄

寺島の金融「無尽講（むじんこう）」と「二六信用銀行」

○無尽講





右の写真は、寺島のある隣保で明治４１年から大正６年まで、１０年間行われていた「無尽講」の**「講事口帳」**と**「掛金請取（うけとり）帳」**の帳簿です。

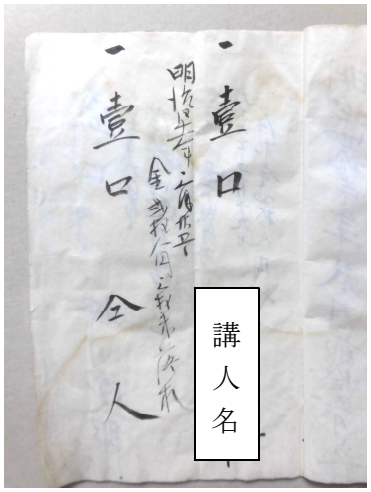
無尽講は、人々が**生活の相互扶助**のために行った金融の組織です。古くは鎌倉時代から存在していました。

無尽講の仕組みは、講に入った複数の人が集まり、その人数と同数の会合を開いてその都度掛け金を集め、希望する人が１回落札して借りるものです。そして全員が順次借り終わるまで会合が行われます。借りる希望者が複数いる時は、最も低い金額を示した人が落札をします。

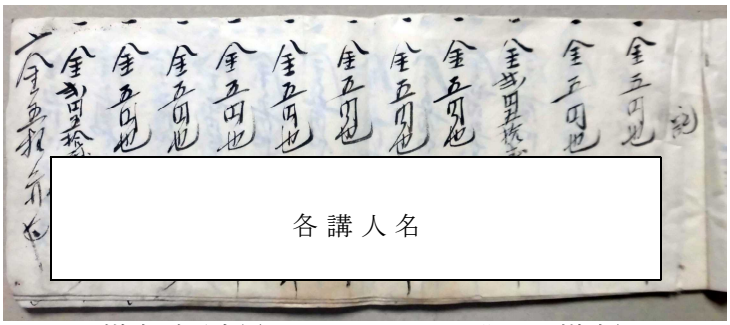
無尽講にはいろいろな形があります。寺島の隣保の無尽講では、１口５０円で、１１人の内９人が２口ずつ、２人が１口ずつ、全部で２０口となり、毎年２回、１０年間で２０回の会合を開くことになります。各回、掛け金は２口の人は５円、１口の人は２円５０銭を集め、合計５０円について入札し落札する形を採っています。２口の人は２回、１口の人は１回落札する権利があります。

<u>最初の２回</u>は掛け金合計５０円について入札し、<u>１回目は、２８円３０銭の落札</u>となっています（下の写真）。ところが、<u>３回目</u>は掛け金を２口の人は一人３円１７銭、１口の人は１円５８銭５厘と低くし、合計（３１円７０銭）をそのまま落札しています。落札者は抽選で決めたものと思います。以後、このような方法で掛け金を少しずつ高くしています。２０回目は記録がされていませんが、落札金は約５０円程と思われます。結局、後から落札するほど、高い落札金を手にすることになります。

無尽講では、多くの掛け金を払いながら、急な入り用で助かった人もあり、また得をした人もあります。また、隣保では途中で講人が亡くなると、その家で講人を受け継いでいきます。無尽講では隣保の付き合いを深める場にもなったようです。

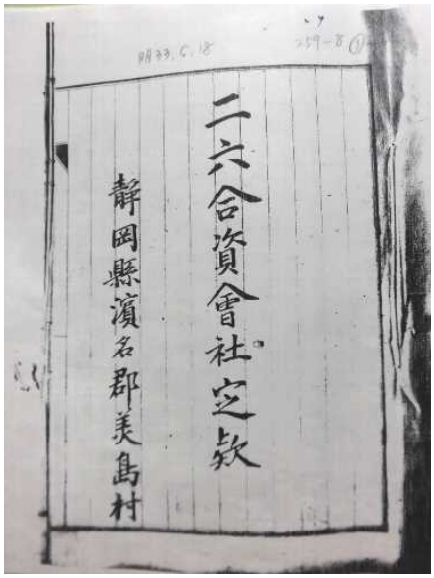


講事口帳（１回目落札結果）



掛金請取帳（１回目１１人の講人の掛金）

○二六合資会社から「二六信用銀行」へ

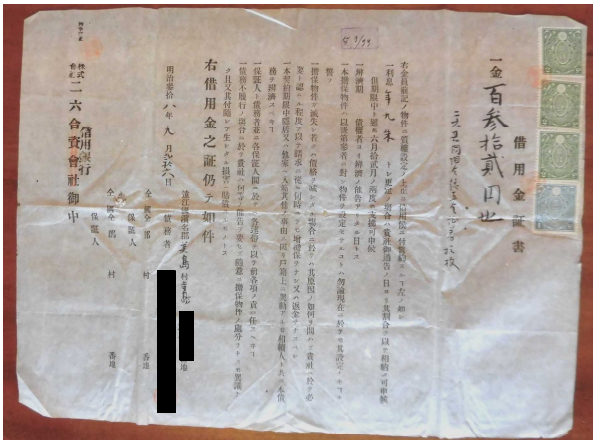


（「源馬家文書」浜松市博物館所蔵）

右上の写真は、**明治３３年５月**に寺島に設立された**「二六合資会社」**の定款です。二六合資会社は、地域の産業を興すための資金を貸し付けする目的で、源馬房次郎氏など７名の地域有力者が資本金を出し合い、寺島１８９番地(美島村の時の地番)に設立されました。

社長は花井要一郎氏、副社長は袴田善五郎氏、社員として、源馬房次郎氏・三浦又蔵氏・中安菊太郎氏・大村治平氏・三井伊代蔵氏の名があります。

しかし、役所は、資本金の少額と小銀行の割拠を理由として銀行業出願を却下しました。そこで２度に及び銀行の必要性を上申し、資本金を１万円として認可申請をしました。その結果、**明治３４年５月に銀行事業が認可**され、営業を開始しました。


借用金証書
一金百参拾貳円也
右借用金之証仍テ如件
明治参拾八年八月廿六日
[redacted]
株式一六合資會社御中
信用銀行

その後、明治３５年の産業組合法の公布により、信用組合が発達するようになると、**明治３８年３月に「二六信用銀行株式会社」を設立し**、資本金１０万円、株券額５０円、取締役を花井要一郎氏としました。６**月に「二六合資会社」は解散**しました。

右の写真は、明治３８年９月に寺島の住人が契約した二六信用銀行宛ての借用証書で、合資会社から信用銀行になった後のため、銀行名が訂正されています。また、神明宮文書には、明治４３年に神明宮に御料地払い下げの代金を貸し付けたり、昭和３年に神明宮祭典の寄付をしたりした記録があります。

この頃、貴布祢には、平野又十郎が明治１６年に設立した「永世社」が、明治３７年**「永世銀行株式会社」**(資本金３５万円・株券額５０円)となって銀行業務をしています。浜北地区には、他に**宮口銀行・中瀬銀行・朝日銀行(竜池)**がありました。

その後、昭和２年から始まる金融恐慌による経済不況の中、**昭和４年５月、二六信用銀行は解散**しました。寺島の銀行は約３０年で幕を閉じました。(登記簿による)

ちなみに、別の資料には、昭和４年２月、西遠銀行(第２次)が二六信用銀行を買収したとありますが、詳細は不明です。昭和１６年１月、西遠銀行(第２次)は、遠州銀行に合併し、さらに昭和１８年３月、遠州銀行と静岡三十五銀行が合併し、静岡銀行となりました。(「日本金融史資料昭和編」・「静岡銀行史」による)

＊二六信用銀行の所在地は、現在の１０１０番地辺りと言われています。また、「二六」の名前の理由は不明ですが、二六銀行設立の起源？と関係ある年？かもしれません。

＜お知らせ＞４月の回覧その１１でお知らせしました「遠州大念仏統合９０周年記念大会」（９月１３日浜北文化センター）は、コロナウィルス感染症拡大のため、中止となりました。今後の予定は未定です。

令和２年９月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その１６　　作成　７班　太田隆雄

新四国八十八か所88番札所「大伝寺」

右の写真は、寺島の大伝寺の弘法大師像を安置する「**大師堂**」です。安置されている弘法大師像の台座には、「**四国八十八番**」「**世話人　宇右衛門　弥平次**」と刻まれています。大伝寺は「**新四国八十八か所**」**８８番札所**なのです。大師像は堂内に大切に安置されています。

江戸時代には、近畿を中心とした西国三十三観音や四国八十八か所などの札所を参拝する巡礼が盛んになりました。（Ｐ２下＊大伝寺の巡礼供養塔参照）

四国八十八か所は、空海（弘法大師）ゆかりの地の８８か所の寺を巡る、３００有余里の札所巡拝のことで、歩いて４０日かかるといわれています。この巡礼を**四国遍路**ともいいます。

しかし、遠い西国や四国をまわることができない人々は、それになぞらえてつくられた地域の小さな巡礼をすることが流行しました。「**新四国八十八か所**」巡りもその一つです。

（大伝寺弘法大師像）

新四国八十八か所の資料「新四国札所村順控え」（三新町鈴木家文書）には、札所として浜北区南部から東区・中区・南区・西区に至る地域の寺院名が書かれています。

その中から**寺島付近の１６か所の札所**をあげてみます。

５番	**中条村　安楽寺**	１０番	橋爪村　勘助（大師像は慶福寺）
１１番	白鳥村　正福寺	１８番	東大瀬村　堂（しろかき地蔵）
２７番	漆島村　東光寺	２８番	半田村　竜泉寺
３０番	**笠井村　法永寺**	**３４番**	**貴平村　静観寺**
３５番	有玉新村大日堂（大師像は大師堂）	**４９番**	**内野村弥陀堂（大師像は龍泉院）**
５６番	**小松村　上竜寺（紹隆寺）**	５７番	末嶋村　弥陀堂（浄妙寺）
７６番	**万斛村　甘露寺（７７番があり）**	**７８番**	**内野村　良泉寺（龍泉院）**
８２番	**恒武村　妙光寺**	**８８番**	**寺島村　大傳寺**

３４番　貴平村静観寺（ひのえね）
「文化十三年丙子仲春吉日」

８２番　恒武村妙光寺（ひのえね）
「文化十三丙子三月吉日」

上の２か所の弘法大師像の台座には、**文化１３年（１８１６）**安置の銘があります。新四国八十八か所巡りは、この時より始まったと考えられます。また、「村順控え」や実際の配置からも、番号順ではなく地域ごとに巡ったものと思われます。

現在は、大師像が廃寺などのため移されたり、行方不明となったものもあります。

以下、その他の浜北区内と東区の近くの大師像のみ紹介します。様々な形で安置されています。

５番　中条村　安楽寺
（本堂内）

３０番　笠井村　法永寺
（庭園内）

４９番　内野村　弥陀堂
（龍泉院境内に移されている）

５６番　小松村　上竜寺
（紹隆寺）

７６番　万斛村　甘露寺
（なぜか７７番が安置されている）

７８番　内野村　良泉寺
（龍泉院）（境内）

＊大伝寺には、**西国三十三観音像**（本堂内）や**西国秩父板東第百番巡礼供養塔**（明治３１年、中安重太郎建立）があります。　（百番…西国３３・秩父３４・板東３３観音霊場の巡礼）

令和２年１０月１日

回覧

「寺島の歴史を探る」その１７　　作成　７班　太田隆雄

天明の大騒動　１・２

１　寺島村を舞台に、笠井村と木舟村の大喧嘩

右の写真は、**天明５年（１７８５）**に起きたという大念仏に関する騒動を記した「**盆騒動実録**」という読み物です。実際の騒動をもとに書かれたものと思います。これによると、寺島村を舞台に笠井村と木舟村の大念仏の者たちが、大喧嘩をしたというものです。（川島家文書）

この喧嘩のそもそもの起源というのが、７年前の**安永８年（１７７９）に笠井観音で実際に起きた大念仏の大喧嘩**です。

「７月１４日、笠井観音堂へ新原村の大念仏が回向に来たが、笠井村の年寄りが、笠井村は念仏が禁止されているので断りをした。それで新原村の者はそれを承知した。そこへ木舟新田村と木舟村の大勢の者が来て、新原村の念仏と喧嘩になり、笠井村の年寄りも怪我を負った。そこで笠井村は、藩役人に訴えた結果、双方和睦し、木舟村・木舟新田村には領主により過料が課せられた。」

ということです。

大念仏の停止令は、各村の念仏が出会うと若者の乱暴・喧嘩が多いことから江戸時代中頃より幕末まで繰り返し出されていましたが、実際にはあまり守られていませんでした。

そして、「**盆騒動実録**」を要約すると、

「**天明５年７月１５日**（１７８５）、笠井村の者たちが小松の常隆寺の盆祭りを見学し初盆の家を回向したところ、小松村の者から『木舟村の者が７年前の恨みで喧嘩仕度をしている』と知らされた。笠井村の者たちは、これに立ち向かうと決め、小松村・新原村の者も加勢して準備をした。木舟村の者たちは中条村に陣取って、笠井村への帰り道を塞ごうとしたが、中条村の村役人に断られ、寺島村の**十王堂・椿薬師**付近に陣取った。

７月１６日朝、十王堂・椿薬師付近で、ついに大喧嘩が始まり、寺島の近郷近在の見物人が大勢集まった。そして、とうとう笠井・小松・新原村の者たちは木舟村の者を打ち破り、勝ちどきを上げた。その後、小松・新原村の者たちは笠井の者たちを笠井まで見送って帰った。笠井の者たちは観音堂まで帰ってお礼の回向をした。傷を負った者もいたが、妻や子、親たちも喜び、公儀の沙汰もなく、無事に収まり万歳を唱えた。」

と、書かれています。

＊寺島の**十王堂**は、山下商店の四つ角東、**椿薬師**は北浜南幼稚園付近にありました。

2　笠井村の打ちこわし

二　天明七年（一七八七）　笠井村打毀し徒党の者差押え吟味仰渡さるにつき一札

差上申一札之事

去年十月十六日夜笠井村江大勢押掛ヶ、家作土蔵等打毀及狼藉候一件、徒党之内三人村方ニ而差押、領主井上武三郎役所江訴出候所差出ニ相成、先達而堀田相模守様御掛リニ而一通リ御糺有之、伊奈摂津守様御家来場所江被差遣、重立候者共被召捕当御奉行所ニおゐて、再応御吟味之上左之通被仰渡候

一　末嶋村外弐拾弐ヶ村百姓共、笠井村商人共米穀ゞ売いたし候間、押掛ヶ家作可打毀同意不致村方江者直ニ押掛ヶ、家作可打毀旨被申威、徒党ニ加リ候段不届ニ付、弐拾三ヶ村江過料銭百五拾貫文被仰渡（候カ）

但先達而村預被仰付候者共ハ御差免被遊候段被仰渡候

一　西美薗村甚五郎・小右衛門忰小七儀、去年十月十六日夜村々百姓共騒立罷出候節、徒党之者共江力を添候様寺嶋新田村清蔵任差図いたし候ニ、同意不致村方江者直ニ押掛ヶ家作可打毀旨大勢を申威、一同笠井村江押掛ヶ、庄屋佐次兵衛外四人家作土蔵打毀、其外商人とも見世（みせ）土蔵等数多打損及狼藉候段、清蔵ニ差続不届ニ付、存命ニ候ハヽ両人共遠嶋可被仰付処病死いたし候間可存段被仰渡候

一　寺嶋新田村清蔵・寺嶋村勘兵衛者先達而御吟味中病死いたし候間、其旨可存段被仰渡候

浜北市史資料編近世Ⅱ（木舟新田村平野家文書）より一部

上の文書は、**天明６年（１７８６）１０月と翌月**に起こった笠井村の打ちこわしについて寺社奉行の吟味を受け、関係した２３か村が過料を納めることを約束した証文で、寺社奉行所へ差し出したものの始めの部分です。笠井村の打ちこわしの様子が書かれています。各村の差出人の中に**「寺島村庄屋　奥右衛門　百姓惣代　源蔵」**の名もあります。

天明２年から天明８年にかけて、東北地方を中心に天候不順で作柄は最悪となり、諸国大凶作となりました。死者は百万人近くにのぼり**「天明の大飢饉」**と言われました。老中田沼意次の権勢はかげりが見え、大凶作・餓死者・一揆・打ちこわしが頻発し、ついに失脚をしました。

このような中で、始めに二俣村の商人が暴利をむさぼっているといううわさが北遠に広まりました。そして１０月１６日の夜、現在の浜北区や東区の村々が多数加わった打ちこわしが笠井村で発生しました。参加した村は２３か村で千人余といい、凶作・米穀の高騰の被害を受けた畑作中心の村々です。その内、浜北区内の村は、**中瀬村・西美薗村・東美園村・油一色村・小林村・木舟村・小野村・宮口村・岩水村・安泰寺村・小松村・新原村・寺島村などです。**

笠井村は木綿取引の中心地で米穀・酒・油取引や販売が行われており、商人たちが米穀を買い占めて高利を得ているとして、攻撃の対象になりました。庄屋山下佐次兵衛や４人の家・土蔵が打ち壊され、その他の商人の店などが多数被害を受けました。道路上には衣類や木綿が投げ散らされ、物や金銭の略奪がされました。

そして、役所より「百姓ども、笠井村に押しかけ家作・土蔵等多数打ちこわし狼藉に及び、不届きである」として、捕らえられた徒党の内の数名は江戸で寺社奉行の吟味を受け、各村に過料銭１５０貫文（約２５両、２００万円相当）を命ぜられました。庄屋など村役人も江戸に出府し、その費用も村中に割り当てられました。主だった者は遠島に処せられ、獄死した者もいました。**打ちこわしを指図した寺島新田村の清蔵**は、**寺島村の勘兵衛**とともに、**「吟味中に病死」**とされました。厳しい取り調べがされたものと思われます。

令和２年１１月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その１８　　作成　７班　太田隆雄

寺島の蔵・倉を巡る

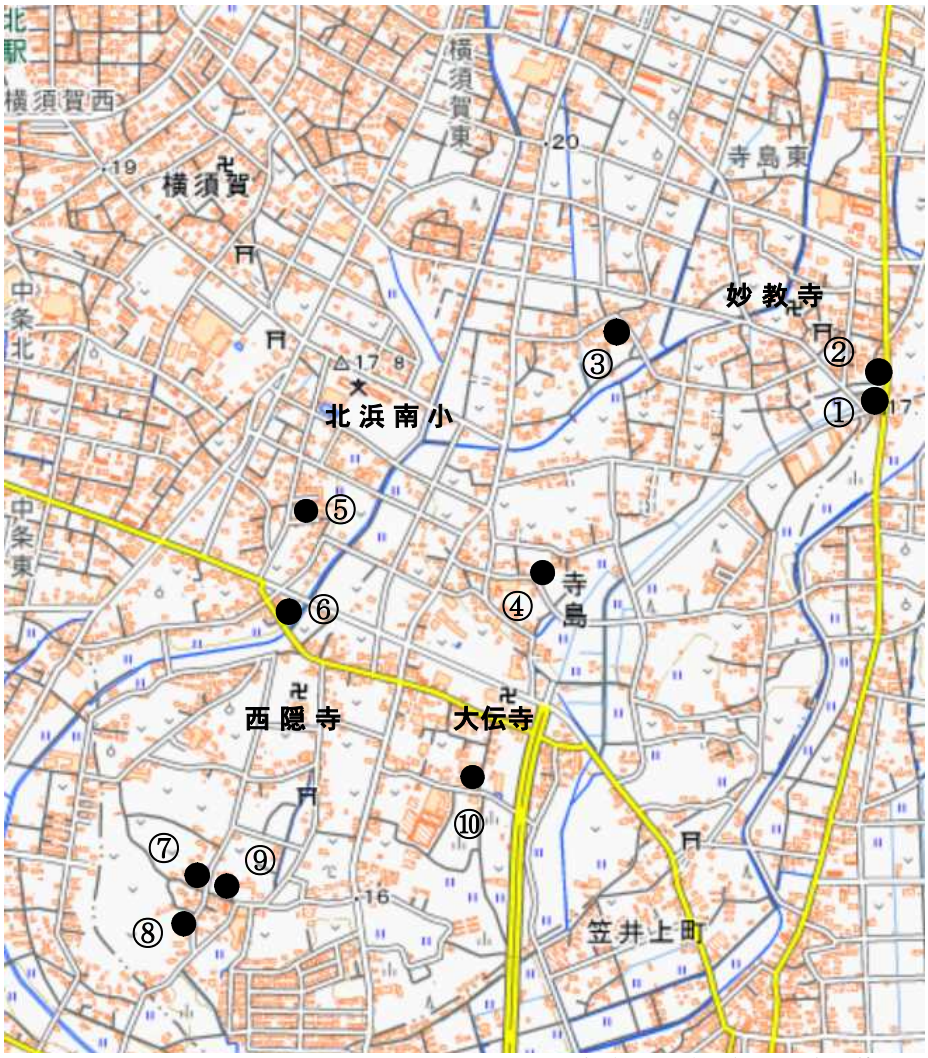
寺島を巡ると、白い漆喰の土蔵や石造りの倉をいくつか見ることができます。中にはレンガ造りの倉もあります。しかし、すでに解体されたという話も聞きました。

土蔵は江戸時代には多く建てられ、石造りやレンガ造りの倉も、明治時代に建てられるようになりました。いずれも昭和の初めころまで建てられました。

蔵も倉も「くら」といいますが、もともと大事な物を蓄えたり、しまい込む建物を「蔵」といい、穀物をしまう建物を「倉」といったそうですが、いずれも盗難や火災の被害、気候の変化から収納物を安全に保管するための建物です。

土蔵は、外から木の柱などが隠れるように、四面の壁を土と漆喰で塗り固めて耐火構造にしてあります。笠井の町では、大商人が店を蔵造りにした「蔵見世（くらみせ）（蔵店）」を造りました。

また、石造りの倉は、木の骨組みの外に石の壁を張って同じく耐火構造にしてあります。



国土地理院電子地形図（タイル）を使用

特に天竜川流域の石造りの倉は、伊豆半島で産出される**「伊豆石」**を使っているのが特徴です。凝灰岩系の加工しやすい等の性質がある石です。

天竜川を下った木材が、掛塚から船によって江戸・東京に運ばれ、帰りに船のバランスをとるために伊豆の石が積まれて、戻りました。その石が天竜川流域の各地に運ばれ、倉が造られたのです。

寺島のいくつかの蔵・倉を紹介します。椋本家の伊豆石の住宅も珍しいものです。

①椋本家　伊豆石の倉

昭和１１年、大瀬にあった米倉を移築。入り口は店舗から続く。商品倉庫とした。

②椋本家　**伊豆石の住宅**

大正１２年建築、住居兼店舗。平屋建てだが、軒高が高く梁は二重。火災に備えた。

③花井家　伊豆石の倉

明治の終わりごろ建築。藍染め用の倉として使用。横に藍染め作業場があった。

④中安家　レンガ造りの倉

明治ころ建築。江戸時代から木綿問屋・焼酎・味噌造りをした。元は土蔵があった。

⑤源馬家　土蔵　現存しない

なまこ壁。明治時代、笠井で綿織物の源馬商店を営む。庄カネショウの軒瓦がある。

⑥市川家　伊豆石の倉

昭和３年市川利一郎氏建築。㊧マルショウの軒瓦。戦前綿織物業の倉として使用。

⑦中安家　土蔵

大正～昭和初め、中安時十郎氏建築。主に米など貯蔵。忠一氏の神明宮梵天が残る。

⑧大村家　土蔵

建築年は不明。漆喰壁はトタンで補修。雨樋受けの折れ釘が大きく飾りとなる。

⑨源馬家　土蔵

大正～昭和初め、中安時十郎氏が建築という。正面腰は、なまこ壁。

⑩中安家　土蔵

大正１０年建築の最大級の土蔵。折れ釘が並ぶ。唐破風の瓦葺きひさしは、昭和６年建築で七福神の瓦像が載る。共に中安時十郎氏建築。地窓（床下換気口）の石扉に㊥の屋号、軒瓦に家紋が付く。戦前より山中織物を営む。米などの倉として使用。

令和２年１２月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その１９　　作成　７班　太田隆雄

寺島を含む美島（みしま）村合併・分離紛議

明治２２年（１８８９）４月、市町村制施行と町村合併推進により、**寺島村・中条村・横須賀村・高畑村・東美薗村・西美薗村・油一色・本沢合村の８か村が合併**して、**美島村が誕生**しました。（参照「寺島の歴史を探る」その５）

しかし、合併前後には、南部地域と北部地域の軋轢（あつれき）や村同士の思惑があり、合併は簡単にはいきませんでした。その様子を見てみたいと思います。

明治２１年　８月 １０月	**寺島村・中条村・横須賀村の３ヶ村合併願いが出される。** 役場を寺島字一本木西に設置する条件で８ヶ村が合併し，美島村が成立することが決まる。
２２年　３月 **４月** ７月	県より，**役場の位置を東美薗字中瀬に変更命令**される。 **美島村が成立する** 村会で，役場を寺島字一本木西に設置することを議決する。
２３年　３月 ６月 ８月 １１月	**県知事に，美島村より寺島・中条・横須賀の旧３ヶ村分離願いが出される** 美島尋常小学校が休校する。（給料不払いにより職員辞職） 明治２２年４月からの税の不納者が約４００人となる **村会で，改めて旧４ヶ村ずつの分離議決**をする。 寺島・中条・横須賀・高畑で一村となす。 東美薗・西美薗・油一色・本沢合で一村となす。 郡長より，**分離決議は村会の権限外とされる。**
２４年　１月 **７月**	郡長より，役場は寺島字一本木西とすることを含む**和解勧告**がされる。 **和解が成立し，分離が回避される。**

市町村制施行に向けて町村の合併が推進されることになり、**明治２１年（１８８８）８月**、**寺島村・中条村・横須賀村の３か村の惣代より合併願い**が、県知事に提出されました。それによると「寺島・中条・横須賀村は、従来より入会（互いの村に入って）耕作をし、宅地は隣接し、地価は公平で地形も同じく、民情も通じ合い、合併に不都合はない。」と述べています。しかし、郡の役所は、「小村落３か村の合併では入費（かかる費用）の負担が難しく、困弊（苦しく）となる。」として聞き入れられませんでした。

その後、北部５か村より３か村に働きかけがあり、役場をほぼ中央に当たる寺島地内の字一本木西に設置するとの条件で、**８か村の合併を受け入れ、明治２２年４月美島村が成立**しました。しかし、合併の直前に、県から変更命令があり、**役場の位置は、北部の東美薗字中瀬に指定**されてしまいました。これが合併後の紛議の主な原因の一つとなりました。

合併後の７月、美島村会では、合意した通り役場を寺島字一本木西に設置することを議決しました。その後、８か村合併による問題が村会に提起され、「８か村の合併は、３か村の合併と比べ、入費の負担が少なくなっていない。学校を８か村の中央に設置すれば距離が遠くなり、教育に大害がある。分校を設置しても入費がかさみ負担に耐えない。３か村が分離すれば種々の軋轢（あつれき）はなくなり、教育・経済に大いに利益となる。」として、**明治２３年３月、寺島・中条・横須賀の旧３か村は、美島村からの分離願いを県知事に提出**しました。

このような混乱は、村政に深刻な事態を引き起こしていきました。税金不納者も多数に上り、そのため、学校職員への**給料不払いで職員は辞任**し、２３年６月に**美島尋常小学校が休校し**てしまいました。８月には合併後からの**税金の不納者が約４００人となりました。**

さらに８月、美島村会では、このように南部と北部の地性・人情が合わず、和議親睦ができない合併は、将来の見込みがないとして、**改めて旧４か村ずつの分離を決議し、県知事に上申**しました。それは、**寺島・中条・横須賀・高畑で一村**とし、**東美薗・西美薗・油一色・本沢合で一村**とするものです。

しかし、１１月に郡長より、「**分離決議は村会の権限外である**」とされ、聞き入れられませんでした。

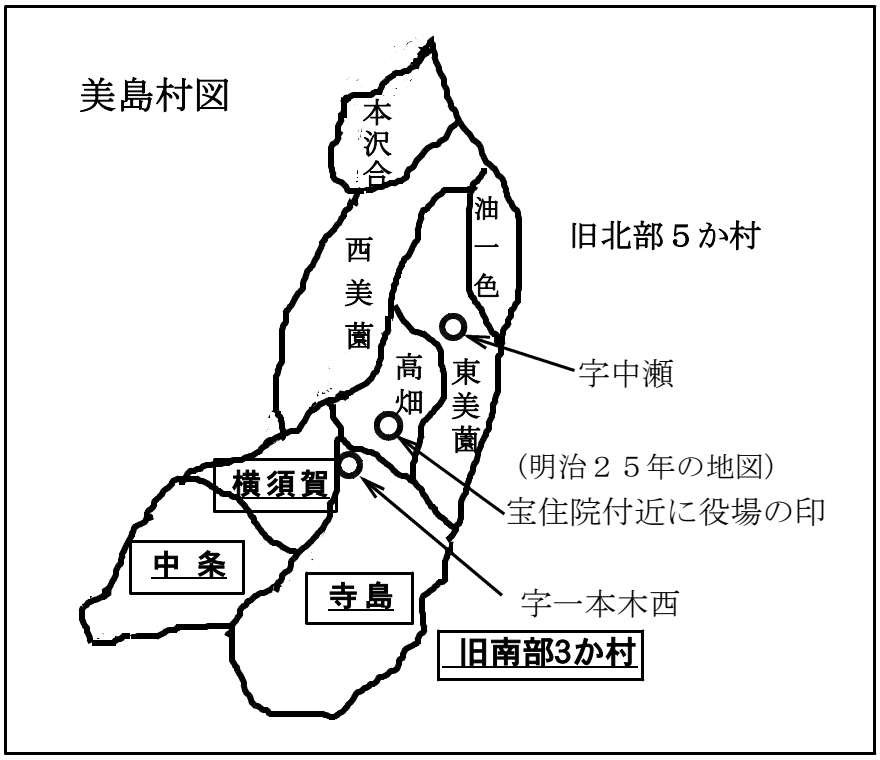
長引く混乱の中、ついに**２４年１月、郡長より、元の合併条件の通り、役場は寺島字一本木西とすることを含む和解勧告**がされました。ようやく**７月に和解が成立し、分離は回避**されました。４年にわたる合併・分離紛議は、終了したのです。

美島村は、明治４１年１月北浜村が成立するまで続きました。

（参考　浜北市史　通史下巻）

＊しかし、実際に寺島字一本木西に役場が設置されたのか不明です。明治２５年発行の地図には、役場は高畑の宝住院付近に表示されていますが、紛議中の一時的なものか？

一本木西の地は、現在は、横須賀東に入っています。（回覧その５　字名参照）



令和３年１月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その２０　　作成　７班　太田隆雄

西隠寺の中興 十八世頑翁石和尚

右の写真は、寺島の原田氏宅に建てられている西隠寺１８世頑翁石和尚の墓碑です。

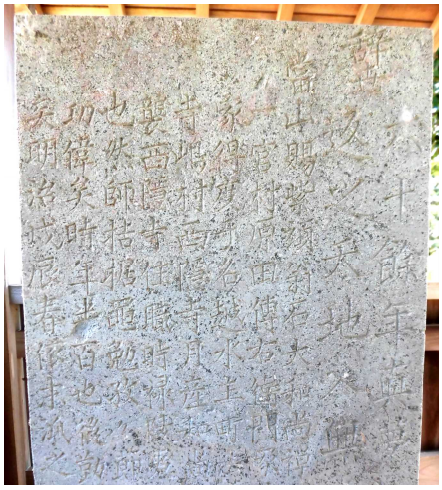
松源山西隠寺は、臨済宗方広寺派の寺院で、６４０年程前の南北朝時代の永徳元年（１３８１）、暘谷玄輝和尚によって開かれました。

西隠寺は、江戸時代に将軍より朱印６石２斗の寄進を受けていましたが、頑翁石和尚が住職となる前には、寺運が衰えて負債を抱えるようになったようです。

頑翁石の墓碑は、跡を継いだ１９世石翁定和尚が、頑翁石の辞世の詩と事績を刻んだものです。

正面に**「五住方廣前當山十八世中興賜紫頑翁石老和尚大禅師」**とあり、西隠寺を中興し紫衣(僧の最高位が賜る紫の衣)を賜った禅師と刻まれています。

頑翁石和尚の事績の概要を紹介します。



頑翁石和尚は、文化１１年（１８１４）、尾張の竒田氏の次男として生まれ、その後一宮村の原田傳右衛門家の養子となり、原田姓となりました。

１２年後、故あって出家し、法蔵寺で３年、また西隠寺の月産和尚の弟子として７年修行しました。

師の跡を継いで住職となりますが、寺はすでに衰えて負債を累々と抱えていたため、頑翁石は一衣一鉢の質素な生活をして励むこと十数年、負債はすべて償いました。

およそ５０歳となり、その後、奥山方広寺の輪番の管長となって勤め励み、高い人望がありました。

明治元年、勧められて宮城に登り、天皇より紫衣の勅許を賜りました。明治時代には、政府が僧侶や神官を指導する大教院を設立し、頑翁石は教導職となり、管長宗内取締りを拝して日夜務め励みましたが、明治７年病となり辞職しました。

そして、再起はできないと自ら知り、隣寺の僧や檀越・門弟・衆生の人々を集め、逆修の式(生前に行う仏事)を行い、遺品を分け与えました。

明治９年春、閑居を建てて移り住みましたが、８月７日、６３歳で示寂しました。遠近の多くの人々が、これを嘆き悲しんだということです。

現在残されている椿薬師や摩利支天の常夜灯は、安政６年（１８５９）内野村の豪農横田氏の寄進により建てられたものですが、柱には頑翁石和尚が記した銘があります。

＊裏面に、墓碑の銘を掲載しました。墓碑は現在私有地内ですので、ご注意ください。

（正面）

五住方廣前當山十八世中興賜紫頑翁石老和尚大禅師

（向かって左面）

辞世　六十餘年真夢劫一空一色付雲烟
　　返之天地入無漏笑見清風明月天

當山賜紫頑翁石大和尚禅師者原尾藩竒田氏次男而出継一宮村原田傳右衛門家故以原田為姓年甫十二有故出家得度乎名越水主町法蔵寺學台密者三年又出就遠江寺嶋村西隠寺月産和尚為弟子修禅學七年而師寂矣尋襲西隠寺住職時禄陵夷屓債累々真一衣一鉢之淡生涯也然師拮据黽勉孜々節倹十有餘年而債額悉償可謂其功偉矣時年半百也後勤奥山之輪番宗派信仰徳望初顯矣明治戊辰春依末派之慫慂有登闕咫尺之美擧賜紫衣

（裏面）

勅許僧道之光榮極矣時際維新革命朝□設大教院遍俵三條之教則播天下櫂衆所擧教導職累遷又拜管長宗内取締於是乎風夜従事勉励是力至明治甲戌罹病不能奉職務辞職養病自知其不可起蒐集隣寺緇流檀越衆生方外知己門弟子等以行逆脩之式又付之以遺物新愛之厚情至矣盡本年春別経營□□付本籍漸至七月告落成直移于此従容養病平常之素願於是乎達嗚乎天不假年八月七日終帰道山享年六十三遠近知不知帳然嘆惜烏

（閑室）

明治九丙子十月十九日建之　當山十九世石翁
謹誌

（向かって右面）

實林妙孝大姉　文久二戌五月十五日
同會　實堂貞參釈尼　慶應四辰年五月拾五日
實庵貞孝大姉

（廷）

令和３年２月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その２１　　作成　７班　太田隆雄

寺島の江戸時代の領主

徳川家康が慶長５年（１６００）関ヶ原の戦いに勝利し、慶長８年（１６０３）江戸に幕府を開いた江戸時代には、寺島は誰が領主となったかを探ってみたいと思います。

寺島村（寺島新田村・打上村は後の分村）は、江戸時代初めから、領主が**大名（１８年間）・幕府（８４年間）・旗本（１６５年間）**と変わり、明治時代になりました。

幕府領では、初め各地の小豪族が代官を世襲し、年貢を取っていましたが、代官による年貢のごまかしや滞納などが多くありました。そこで５代将軍綱吉は、元禄１０年（１６９７）、幕府の財政立て直しの一つとして、代官をやめさせ、その土地とつながりのない代官を派遣し、年貢の徴収を確実にしました。また、経費削減のため５００石以上の旗本の禄米（給与の米）の代わりに領地を与える政策**「元禄の地方直し」**を行いました。

幕府領の寺島３村も代官は辞任し、中央派遣の中泉代官支配を経て、旗本領となりました。**寺島３村は、江戸時代の半分以上の期間が旗本領**でした。旗本も江戸に屋敷を持ち、領地には陣屋を設置して、代官を置きました。（次ページ一部領主の系譜参照）

	＜寺島村＞	
慶長　６年（１６０１）	大名領 浜松城主松平忠頼（寺島新田は分地として存在）	
１４年（１６０９）	大名領 遠江・駿河５０万石国主　徳川頼宣	
元和　５年（１６１９）	幕府領　代官　秋鹿長兵衛朝正	
	＜１６１９～１６２６頃 寺島村より寺島新田村分村＞	
寛永３年(1626)～同９年	幕府の命により閉居した青山忠俊に一時領地が渡された 秋鹿内匠朝重	
寛文４年（１６６４）か	幕府領　代官　市野惣太夫実利（真利） 市野惣太夫真防	
	＜寛文１１~１２年(1671~72) 頃寺島村より打上村分村＞	
元禄１０年（１６９７）	「元禄地方直し」始まる　市野惣太夫真防代官辞任	
１１年（１６９８）	幕府領 中泉代官　野田三郎左衛門秀成	
１５年（１７０２）か	窪島市郎兵衛長敬	
	（寺島村は、元禄１３年３月~１６年３月浜松藩領としている文書もある。？）	
	＜寺島村・打上村＞	＜寺島新田村＞
１６年（１７０３）	（五井松平氏） 旗本　松平忠明	（五井松平氏と北条氏の相給） 旗本　北条新蔵氏英
	（志都呂陣屋）⋮	（匂坂西陣屋）⋮
		氏和まで７代
天保１４年（１８４３）		＊家事不取締で逼塞し、常陸国へ
		幕府領 中泉代官　山上藤一郎
弘化　２年（１８４５）		旗本　松平内蔵助正名
		（陣屋なし、　正孝
慶応　４年（１８６８）	忠庸まで８代	安間村に詰所）　正當

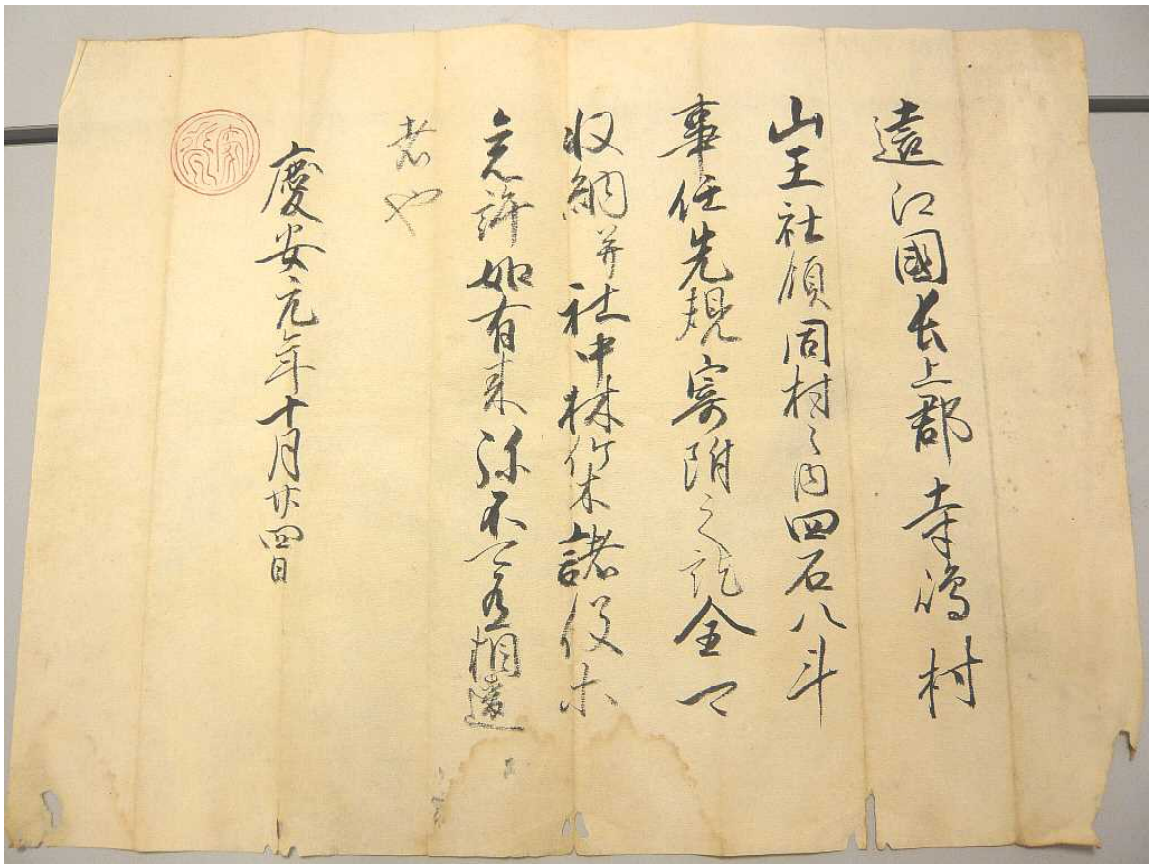
＊相給…　一つの村を複数の領主が分割して支配すること

＊逼塞…　門を閉ざして昼間の出入りを禁じた

令和３年３月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その２２　　作成　７班　太田隆雄

寺島の古文書2点を紹介



山王権現社領　家光朱印状（写し）

とおとうみのくにながかみのこおりてらじまむら
遠江国長上郡寺嶋村
さんのうしゃりょう　どうそんのうちよんこくはっとの
山王社領同村之内四石八斗
こと　せんきにまかせてこれをきふしおわんぬ　すべて
事任先規寄附之訖全可
しゅうのうすべし　ならびにしゃちゅうりんちくぼくしょ
やくとう
収納并社中林竹木諸役等
めんきょありきたりのごとく　いよいよそういあるべから
ざる
免許如有来弥不可有相違
ものなり
者也
けいあん
慶安元年十月廿四日
（家光朱印）　　（山王　袴田泰史氏所蔵）

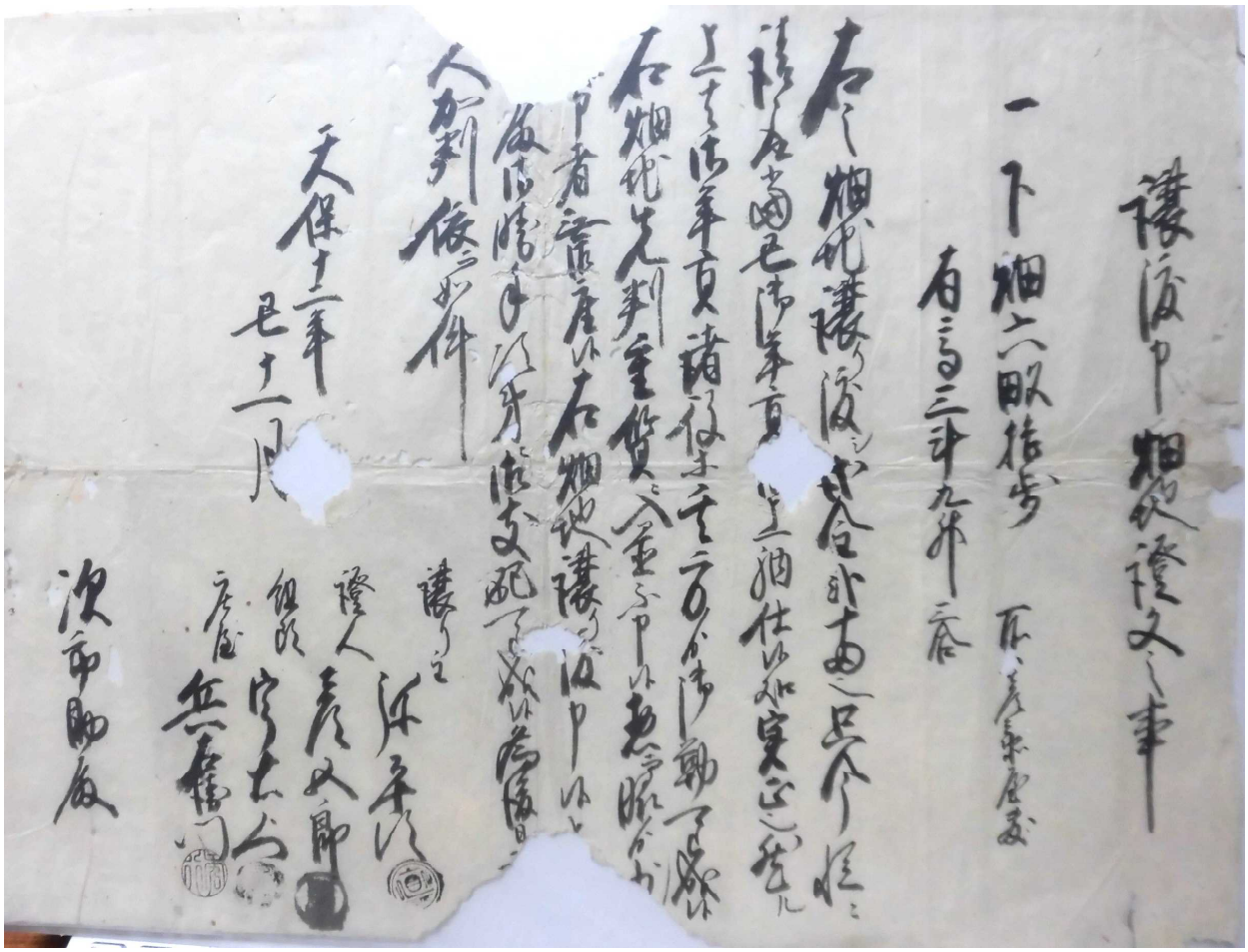
この文書は、江戸時代の慶安元年（一六四八）山王の山王権現社に与えられた三代将軍家光の朱印状（写し）です。寺島村内の四石八斗が寄進され、諸税が免除されています。

将軍が替わると御朱印改めによって新たに朱印状が発行されました。家茂（いえもち）まで九代の写しが残されています。

朱印状は、寺島では他に神明社（神明宮）・大伝寺・西隠寺に与えられていました。本紙（原本）は慶応四年に「判物差出令」により召し上げられました。

袴田家は、山王権現社の神官を務めました。山王権現社（日吉神社）は、明治七年神明宮に合祀されました。

畑地譲り渡し証文



譲渡申畑地證文之事

一　下畑六畝拾歩　　所ハ彦兵衛屋敷
　　有高三斗九升三合

右之畑地譲リ渡シ代金弐両也　只今慥ニ
請取當丑御年貢（御）上納　仕候処実正也　然ル
上者御年貢諸役等其方ゟ御勤可被成候
右畑地先判重質ニ入置不申候　惣而脇ゟ少し（茂）
（構）申者無御座候　右畑地譲リ渡申候（上者）
（貴）殿御勝手次第ニ御支配可被成候　為後日（證）
人加判依而如　件

天保十二年
丑十一月

譲リ主　弥平次㊞
證人　彦五郎㊞
組頭　宇右衛門㊞
庄屋　兵右衛門㊞

次郎助殿

（太田家文書）

この文書は、天保十二年（一八四一）、弥平次より次郎助に、畑地を金二両で譲り渡した証文です。広さ六畝拾歩（六二七㎡）の下級の畑で、石高は米で三斗九升三合分です。「今年の年貢は確かに上納しました。後の年貢や税はそちらの方が勤めてください。畑は二重質に入っていません。他から関わり文句を言う者はありません。譲り渡した上は、貴殿の勝手次第にしてください。」と記されています。

この畑の年貢高は、約３割（含付加税）として米一斗一升八合分です。寺島村は畑方の村で、金納をしました。

令和３年４月１日

回覧

「寺島の歴史を探る」その２３　　作成　７班　太田隆雄

寺島と寺島周辺の伝説

各村々には、昔から伝えられている話がありましたが、最近はほとんど残らず知られていません。おじいさん、おばあさんが子や孫に話す機会も失われています。豊西村出身の御手洗清著の「遠州伝説集」などには、様々な伝説が集められています。

寺島や周辺にもいろいろな伝説がありました。いくつか紹介してみます。

○「お仙源兵衛」

徳川の終わりか，明治の初めのころ，寺島のあたりに醤油の醸造を業とする村有数の豪家があり，お仙という十九になる娘があった。お仙は美貌の持ち主であった。また，村に源兵衛という青年がおり，貧しい小作百姓であったが，実に美男であった。村の娘たちの心を湧かせるのに充分であった。

ところが，お仙と源兵衛は深い仲になって恋を語る姿が村人の目に映るようになり，ある者は風儀のびん乱を憂い，ある者は嫉妬をした。それでついに，二人は村に住めなくなって，大阪にと逃げて行ったというが，そのあとは知る人もない。

お仙源兵衛の恋を，当時の子供達は数え歌に作って手まりをつくとき歌っていた。

一つとせ，人も通らぬ山道を
　　お仙さと源兵衛さは通ったげな
二つとせ，二人の仲は墨すずり
　　濃いか薄いか私やしらぬ
……（略）……
十四とせ，十四島田に髪結うて
　　源兵衛さと一緒に歩きましょう
十五とせ，ご天の雲は晴れてきた
　　源兵衛さとお仙さはまだ晴れぬ

（「遠州伝説集　第１２０話　御手洗清著」より）

○「権蔵原」

寺島と上村(笠井上町)との境(若草団地の東)に「権蔵原」（**ごんじょばら・ ごんじょやま**）と呼ばれる松林が続いていた。寺島から笠井に行く道があり、一人で歩くのは物騒な感じの場所であった。今は、林はなくなってしまった。

地名の由来として、信州からの帰農武士、鈴木権太夫が開発した所と言われている。

（「町名の由来」より）

また、別の伝えでは、

信州の松本家中、鈴木権太夫は癩病にかかり，妻さよと共に廻国に出て１０年，笠井新田の持当院に逗留した。妻が臨月となり同院で男子を出産し「権蔵」と名付けた。その後もまた一男を出生した。そのことを知らされた信州の兄たちが駆けつけて対面を喜び，金子十両を同院に納め病気平癒の祈祷をした。また三七廿一日護摩修行をした結果，ついに病気が平癒した。その後夫婦は長生きし亡くなった。地名はこの権蔵に関わって付けられたのではないかという。（東海展望「はままつ・笠井の昔ばなし」，「郷土の俤」より）

＜寺島のお年寄りの「ごんじょやま」（ごんじょばら）の話＞

子供の頃、夜「ごんじょやま」を通って笠井の祭りをみんなで見に行ったが、山の中の細道で、大仏のような大男が出てあぐらをかいていた。それでびっくりして通ることもできず逃げて帰った。「ごんじょやま」で化かされた人が何人もいた。

また、何人も「ごんじょやま」で追い剥ぎにやられたというので、中学の時、剣道の腕に覚えがあって、みんなが止めるのを聞かず、一人で棒を持ってやっつけに行った。しかし、追い剥ぎはいなくて、山を通り抜けてまた帰ってきた。

○「チョンボ山のタヌキ」

昔その昔，村のはずれ田んぼのわきにチョンボ山という周囲１００m位の雑木林の山があった。いつから住んでいるか分からないほど年老いたタヌキの夫婦がいた。今では昔ほど元気も出ない。そのタヌキは，いつもやって来る百姓夫婦を待っていた。百姓夫婦が今日も腰に弁当を下げてやって来ると，和尚さんに化けて「わしゃあ，とてもえらい坊さんだよ。道に迷って腹がすいた。」と言ったが，化けたつもりが年老いているため，まだしっぽが残っている。でも，百姓夫婦はだまされたふりをして，おにぎりを一つ差し上げた。青空が広がり心地よい，渡る風もさわやかだった。今でもこのあたりをチョンボ山と呼んでいる。

＊チョンボ山は，北浜南小学校の北、協働センター付近に昔あった林の山です。小さな山の意で「チョンボ山」と呼ばれました。北浜南小付近の川には一本橋があり、ここで子供たちがよく遊んだという。

（「横須賀老人クラブ歴史教室」資料）

○「庄園の松」（明神松）の伝説は、その１３に紹介してあります。

○「経田野（きょうでんの）の狐」

寺島の北隣，高畑に経田野という雑木林の寂しい所があり，その中に一本道が通り，中ほどに埋葬地があった。ここには昔は弁慶狐という狐がいて，弁慶かすりを着た美しい娘になって村人をだましたという。

ある日，村の権爺さんが，笠井の町から油を買って経田野を通りかかった時，美しい娘が寄ってきて，倉からお金を出したいけれど手伝ってほしい，お礼に半分あげますと頼まれ，いい金儲けと付いて行った。大きな屋敷に入って，娘が倉を開け，中から百両，二百両と投げ出した。権爺さんは大喜びで懐やたもとにお金を突っ込んで身動きできない程になった。

そのうちに夜が白々と明けて，村の一人が通りかかると，権爺さんが墓場の中から骨がめを出して懐にねじ込んでいるではないか。何をしているんだと背中を突いてやると初めて正気に返り，だまされたと泣き声をあげたという。

また，ある時，通りかかった武士が，狐の話を聞くと，退治して村人の難儀を救おうと毎晩狐の出るのを待ち，「今日出ん，今日出ん」と半年も待ち構えた。それで，村人はだれというとなく「きょうでん野」と言うようになった。

（「遠州伝説集　第１２６話」　御手洗清著　より）

令和３年５月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その２４　　作成　７班　太田隆雄

寺島3か村の村絵図（1）

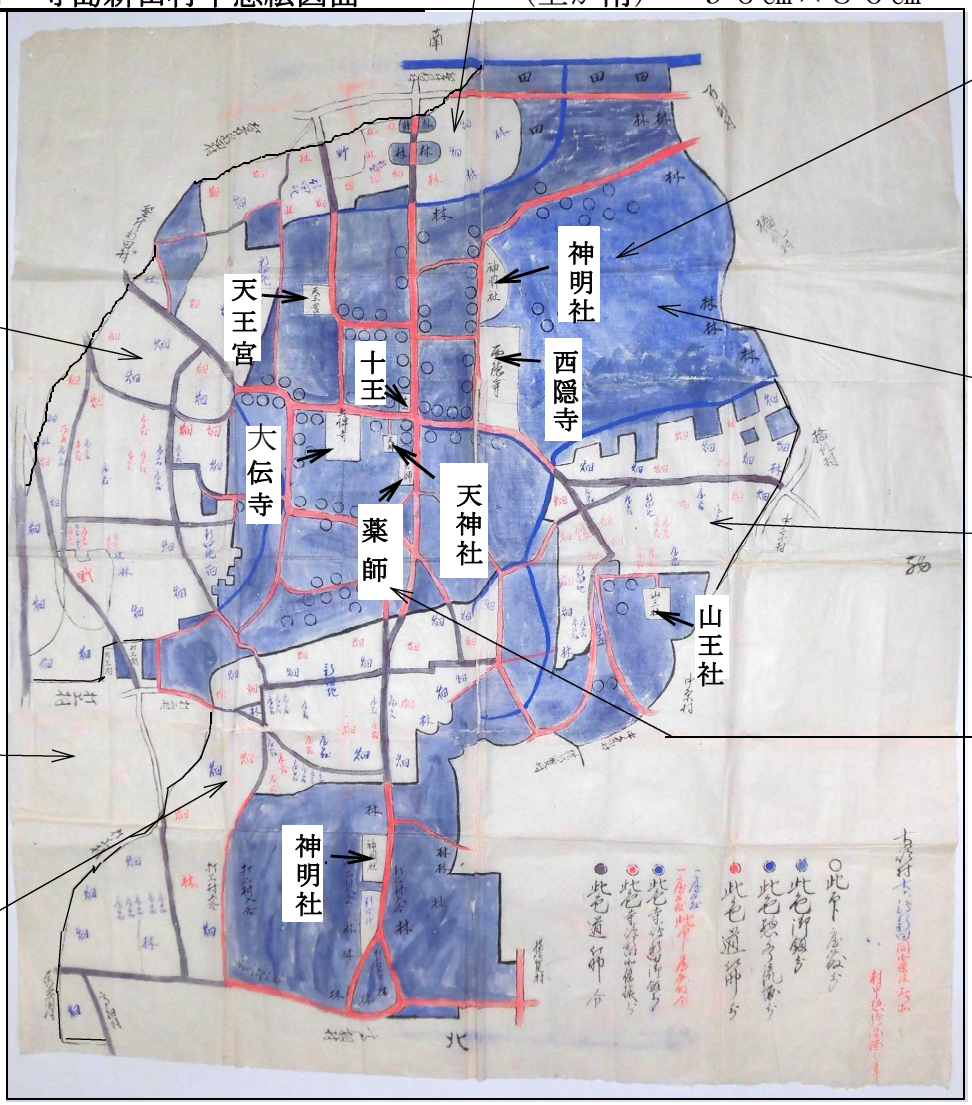
江戸時代の寺島村・寺島新田村・打上村の村絵図が残されていますので、紹介します。

① １つは、**寺島村・寺島新田村中惣絵図面**で、**天保１４年以前のもの**です。おそらく寺島村の庄屋が村内の管理のため作成したものと思われます。

② もう一つは、**旗本五井松平家が、知行する村々の村絵図**と村の石高・年貢高・年貢に関する内容などを書き改めた書物**「御知行所村々手留」（天保１２年）**があり、それに載せられている寺島村・寺島新田村・打上村の３か村の絵図です。

①寺島村・寺島新田村中惣絵図面　（上が南）　９０㎝×８０㎝

現在の若草団地



寺島新田村
東新田

寺島村

寺島新田村
山王

打上村

寺島新田村
北新田

北の神明社は内宮、南の神明社（現在の神明宮の地）は外宮です。

「薬師」は「椿薬師」で、旧公会堂の場所にありました。（現在は西隠寺内）

＊**寺島村**は、濃い色の部分です。寺島村の北部は打上村の入会地となっています。

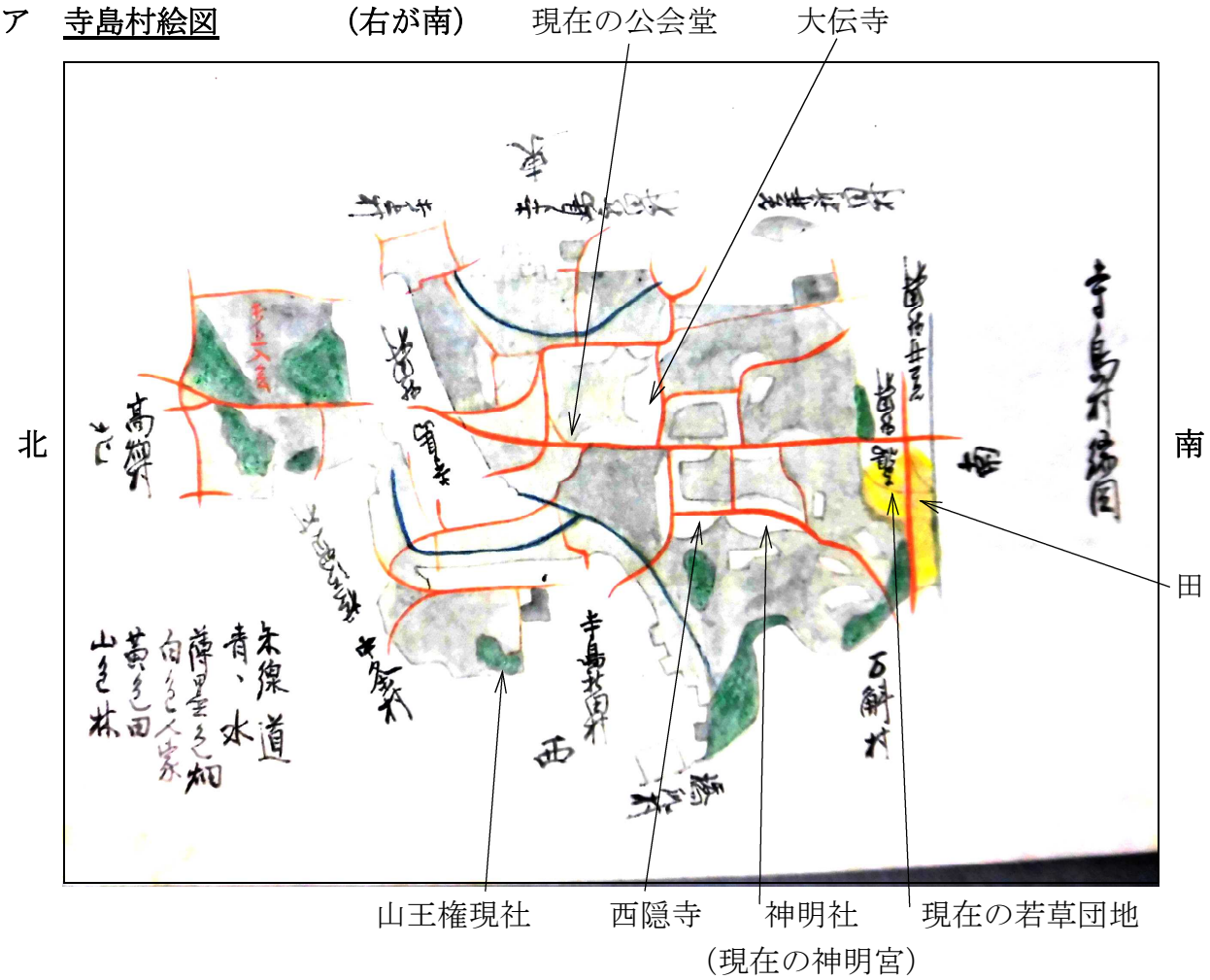
＊**寺島新田村**は、山王・北新田・東新田の３か所に分散しています。**五井松平氏と北条氏**の相給（分割知行）で、領主ごとに屋敷・畑などの文字が赤青２色に分けられています。

②「御知行所村々手留」（天保１２年）の寺島３か村　　（浜松市立中央図書館所蔵）

＊　各村の年貢の徴収などのため、人家・畑・田・林など、土地の用途により色分けされています。寺島３か村の田は一部に表されていますが、ほとんど畑です。

＊　寺島の３か村は皆畑の村とされ、年貢は金納していました。また、１０年間一定の年貢率（定免）で、付加税を含めて約３割となっています。

ア　寺島村絵図　　（右が南）



・　中央を南北（図の左右）に延びる道が、若草団地や公会堂の横を通る道で、北は高畑へ通じています。

・　若草団地辺りは田になっていますが、その他はほとんど畑が広がっています。

・　北部は山林が多く、打上村の入会地（打上村の人が薪など採りに入ることができる）になっています。

・　西の山王権現社付近は寺島村となっています。

石高	３８５石７斗５升４合	（反別　４８町４反７畝１３歩）
年貢高	１００石３斗７升８合	延米・口米の付加税を含めて１１８石３斗３升１合
家数　１１６軒	男女人数　５０５人	（約２９５俵分）

②の「イ　寺島新田村」・「ウ　打上村」は、次号「その２５」で紹介します。

令和３年６月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その２５　　作成　７班　太田隆雄

寺島3か村の村絵図（2）

②「御知行所村々手留」（天保１２年）の寺島新田村・打上村絵図（浜松市立中央図書館所蔵）

＊　各村の年貢の徴収などのため、人家・畑・田・林など、土地の用途により色分けされています。寺島３か村の田は一部に表されていますが、ほとんど畑です。

＊　寺島の３か村は皆畑の村とされ、年貢は金納していました。また、１０年間一定の年貢率（定免）で、付加税を含めて約３割となっています。

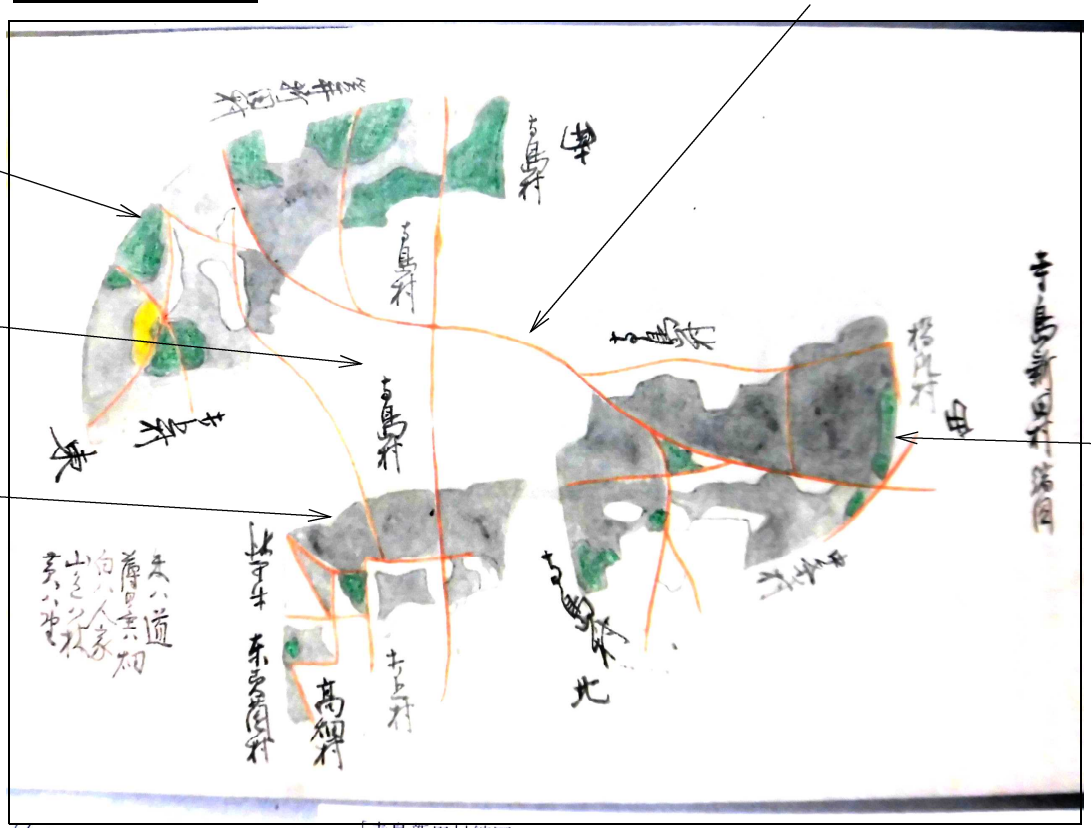
イ　寺島新田村絵図　（上が南）　南　　笠井～小松の道

東新田

寺島村

北新田

山王



北

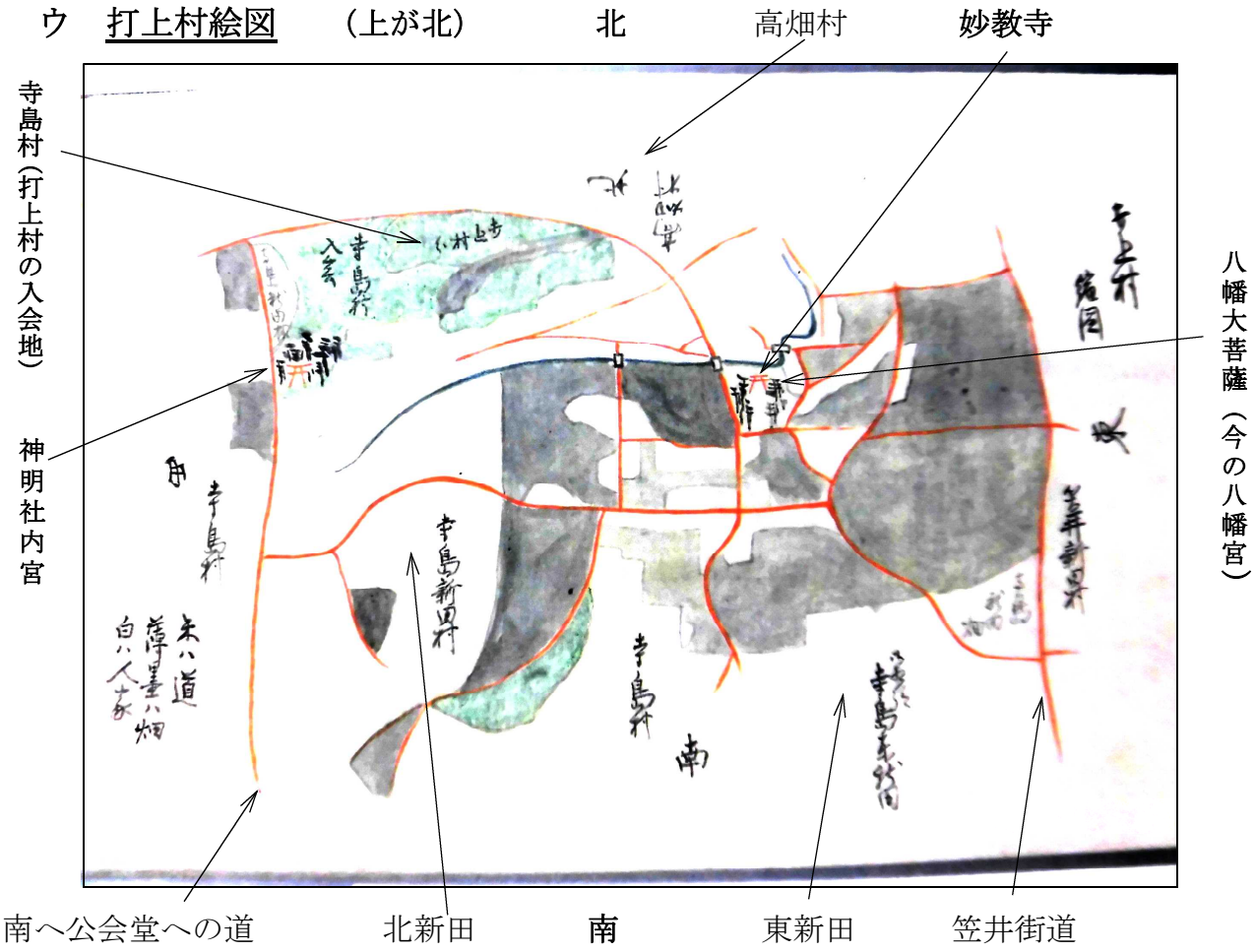
・　**寺島新田村**は、新田（畑）の開発により、寺島村から分村した村で、寺島村の周囲に３つの地域（**山王・北新田・東新田**）に分かれています。寺島村が中央にあります。

・　寺島新田村の東新田地域は、若草団地付近から打上村の南まで広がっています。林が多くあります。色の濃い部分は畑です。

・　寺島新田村は、**旗本五井松平氏と旗本北条氏との相給（分割知行）**となっています。

＜五井松平領＞	石高　１１６石７斗８升８合	（反別　１６町７反２畝）	
	年貢高　２８石６斗３升５合	延米・口米の付加税を含めて	３３石９斗２升
	家数　３５軒　男女人数　１５０人		（約８４俵分）
＜北条領＞	石高　８３石７斗１升４合（年貢高　約２５石　約６３俵分）		

ウ　打上村絵図　（上が北）



・　打上村は、畑の開発によりできた村で寺島村から分村しました。
・　西を南北に通る道が、公会堂横から高畑に向かう旧道で、神明社（内宮）があり、最も東を南北に通る道が、笠井街道です。中央に今の八幡宮があります。
・　ほとんど畑が広がるが、寺島村の北部は、林が多く打上村の入会地になっています。
・　南の寺島新田村には、「御相給　寺島東新田」とあります。

石高	７５石３斗８升４合	（反別　９町７反３畝１４歩）		
年貢高	１７石１斗６升２合	延米・口米の付加税を含めて		２０石２斗７升９合
家数	３８軒	男女人数	１４０人	（約５０俵分）

＜新しい認定文化財のお知らせ＞

９月１日回覧しました「その１６」新四国八十八か所８８番札所「大伝寺」の弘法大師像が、令和２年度浜松地域遺産（認定文化財）に認定されました。寺島の認定文化財は４点となりました。

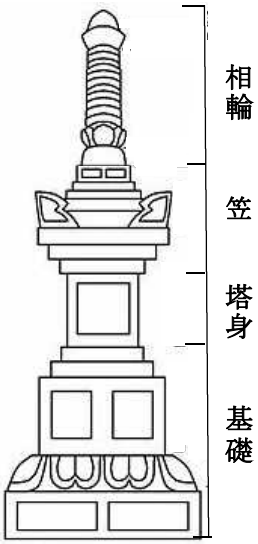
令和３年７月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その２６　　作成　７班　太田隆雄

西隠寺の供養塔 と 大伝寺の供養像

①大乗妙典千部供養塔

宝篋印塔の例



②大般若経真読満願・西国三十三所聚斂供養之尊像（聖観音像）

①　大乗妙典千部供養塔（西隠寺）

左の供養塔は、西隠寺の門前に並んでいる石仏の間に建てられています。供養塔には、**「大乗妙典千（部）供養　瑞龍謹　脩」「享保十二（年）正月」**（１７２７）と記されています。大乗妙典は、衆生を迷いから悟りの世界に導いてくれる教えを記した経典（一般には「法華経」という）で、これを一千回読誦した記念に、**西隠寺１０世瑞龍和尚**が造立しました。しかし、現在の塔は造立当初と異なり、後年に、文字のある部分と宝篋印塔の基礎部分、五輪塔の部材などを組み合わせ、建て直されているようです。

・宝篋印塔の基礎部分は、１４世紀後半、西隠寺開創時期に近いものとされています。

（参考「浜北市史資料編　原始・古代・中世」）

②　大般若経真読満願・西国三十三所聚斂供養之尊像（大伝寺）

右の仏像は**聖観音**で、寺島の大野氏奉納により再建されていますが、その台座は、造立当初のものです。台座には、**「大般若經真讀滿願　西國三十三處聚（斂）　供養之尊像」、「宝暦十二壬午天秋彼岸日　長冨山閑居空萬石　欽而誌焉　龍水蓮」**（１７６２）と記され、他の２面には**大伝寺１５世萬石和尚**の詩**「真讀願成般若經……」**が記されています。これは、萬石和尚が、様々な般若経典を集大成した「大般若経」６００巻を真読（全て読む）したことと、西国三十三観音を参拝し、大伝寺に三十三観音を安置したことを詠んでいます。これを記念し**１６世龍水和尚**が供養の聖観音を造立したものと思います。

ちなみに昭和４６年頃まで、境内に観音堂がありましたが、現在は観音堂はなく、三十三観音は本堂内に移され安置されています。それが宝暦当時のものかは不明です。

①　西隠寺の供養塔　（正面）

（正面）
大乘妙典
瑞龍謹脩
千□（部）供養
（裏面）（一七二七）（年）
享保十二□正月

（中）１０世瑞龍和尚の墓（西隠寺）

②　大伝寺の聖観音像台座　（正面）

（大伝寺）
（前）１５世萬石和尚の墓（推定）
（奥）１６世龍水和尚の墓

（正面）
大般若經真讀滿願
供養之尊像
西國三十三處聚□（斂）
（右面）
真讀願成般若經
甚深功徳及幽冥
豁開智恵波羅蜜
十六善神護祖庭
（左面）
佛菩提與諸神社
参禮霊蹤聚土沙
新布観音□□地（霊験）
□山名月照邦家（青）
（裏面）
宝暦十二壬午（一七六二）天秋彼岸日
長冨山閑居空萬石
欽而誌焉
龍水蓮

令和３年８月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その２７　　作成　７班　太田隆雄

寺島の大工 彦五郎

右の写真は、**貴布祢の薬師堂です。**薬師如来をまつる仏堂で、創建は寛文１３年（１６７３）ですが、焼失して後、寛政８年（１７９６）に再建されました。完成までに数年かかり擬宝珠には６年後の享和２年（１８０２）の銘があります。寄せ棟造りの屋根の深い軒は斗栱で支えられており，内部の天井には草花の絵が描かれています。

この薬師堂は、木舟新田村や木舟村が村を挙げて創建・再建しましたが、**創建時には、寺島村の大工「彦五郎」が携わりました。棟札には彦五郎の名が記されています。（次頁の②参照）**

大工「彦五郎」の名は、調べた範囲では、古くは１６００年代、尾野や下小林などの寺社の建築の棟札などに７件、１８００年代の明治７年に１件登場しています。棟札には寺島村の**「藤原正信」「大村彦五郎」「大村彦五郎正延」「大村彦五郎正信」**などとあります。大工「彦五郎」の名は、２２０年以上もその名が受け継がれているようです。

１７００年代には**「大工棟梁寺島村大村弥平治藤原政義」**の名があり、彦五郎は、同じ大村氏の棟梁弥平治と関係が深い大工であったと思われます(＊)。他の資料によると、江戸時代終わり頃の彦五郎の在所は、寺島の清水であったと思われます。

正保４年（１６４７）	尾野尺地神社神札	「大工　**藤原正信**　寺嶋村」
①寛文５年（１６６５）	**岩水寺の鐘再鋳の銘**	**「寺島村　大村彦五郎正延」**
寛文６年（１６６６）	下小林八幡宮の棟札	「大工　**大村彦五郎**」
寛文７年（１６６７）	尾野若宮八幡宮の神札	「大工　**大村彦太郎**」（彦五郎か）
②寛文１３年（１６７３）	**木舟村薬師堂棟札（写）**	**「寺嶋村大工　彦五郎」**
③延宝９年（１６８１）	**下小林八幡宮の棟札**	**「大工　大村彦五郎正信」**
貞享元年（１６８４）	尾野若宮八幡宮神札	「大工　**彦五郎**」
明和３年（１７６６）	尾野八面神社神札	「大工棟梁　寺嶋村**大村弥平治藤原政義**」
④明治７年（１８７４）	**尾野金山権現の神札を写す**	**「寺嶋村大工　彦五郎」**

＜参考資料＞　尾野の歴史「神社物語」・「小野篁と遠州小野一族」・「青山忠俊と小林」・「木舟村野田家文書」　＊その２２の証文にも**「弥平次」と「彦五郎」**の名があります。

＜彦五郎の名が記された資料の例＞

①岩水寺の再鋳鐘銘

岩水寺が、元亀年中に武田軍により兵火に遭い、釣鐘が陣鐘に使われて持ち去られたと言われています。慶長１１年（１６０６）に釣鐘が新鋳されましたが、後に破損したため、**寛文５年**（１６６５）に高畑の小野家が中心に願主となって再鋳した鐘の銘の写しが、小野家に伝わっています。

この再鋳の銘に、再鋳に関わった人物の一人に**彦五郎**の名があります。

「供一口提再鋳而献御宝前者也　頌白」
「一聴鐘声　當願衆生　脱三衆者　……(略)……」
「本願當寺務法印権大僧都宥順和尚」
「大工　……」「鍛冶　……」
「維　**寛文五**乙巳年卯月八日　敬白」
「引佐郡気賀町　川合十太夫久重　　小野村　……　中条村……
寺島村　大村彦五郎正延　　柴本村　……　高畑村　……　……　　」
「願主　一番　長上郡高畑村　小野源右衛門正連
　　二番　豊田郡小野村　鈴木善六郎吉次
　　三番　……

（「小野篁と遠州小野一族」より）

②木舟村薬師堂棟札(写し)

「奉建立薬師堂一宇」
「今上皇帝　万歳々々　天地久求圓……(略)…」
「仏子孫繁昌無疑者也　長泉三世龍山書之也」
「御仏駿州安部井川田代村福聚院五世奉傳……」
「木舟新田村　庄屋伊藤太右衛門　同……　本木船村庄屋……　惣組頭　惣百姓
寺嶋村大工　彦五郎」
「干時**寛文十三年**癸丑歳八月十四日」

(浜北市史資料編近世Ⅰ　木舟村野田家文書)

③下小林八幡宮の棟札

老中青山忠俊は、竹千代(後の３代将軍家光)のもりやくでしたが、家光への諫言がもとで勘気を蒙り、所領を削られて、元和９年(１６２３）蟄居となってしまいました。子の宗俊と共に、親戚に当たる貴平村の内藤家に滞在し、寛永３年(１６２６）小林村に移り住みました。忠俊は、下小林に八幡宮の社殿を寄進しています。寛永９年(１６３２)、蟄居を許され、弟の領地相模国今泉村に帰りました。

その後の寛文６（１６６６）年、延宝９年（１６８１）の八幡宮の棟札には、大工彦五郎の名が記されています。

「奉建立八幡大菩薩宮本地正観音菩薩社内安全所」
「惟時**延宝九季**辛酉八月吉辰謹敬白為諸願成就　小畠休也内儀」
「**大工　大村彦五郎正信**　神主村松五郎兵衛國次」

（「青山忠俊と小林」より）

④尾野金山権現社の神札を写す

明治８年に金刀比羅神社の本殿が造営された時、金山彦命が合祀されましたが、その前年に彦五郎が金山権現(後の金山彦命)社の神札を写し、残しています。

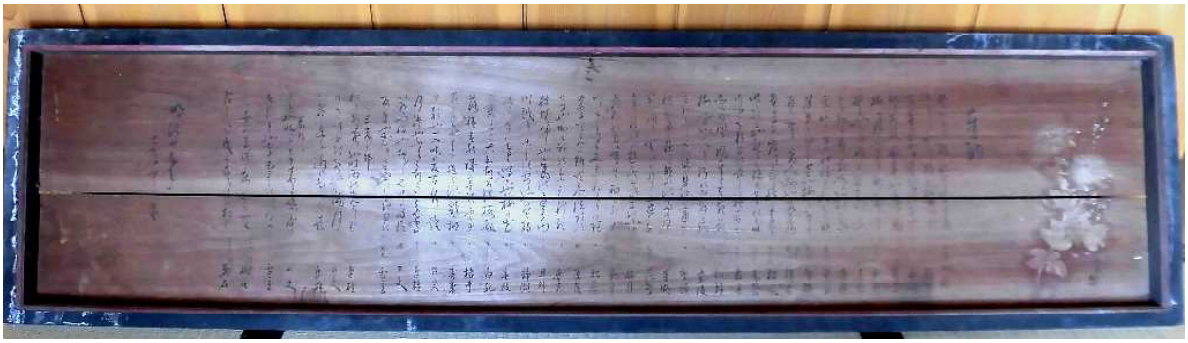
「奉建立　金山権現一宇」「神主　野中太郎左衛門尉」「東尾野村　長畠村　惣立産子」
「享保三戊戌年十月十日」
(裏)「明治七年戊戌年頭是ハ地類中ニ写置申候　**寺嶋村　大工　彦五郎**」

（「尾野の歴史　神社物語」より）

令和３年９月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その２８　　作成　７班　太田隆雄

松島十湖門下の俳人たち



松島十湖は、中善地村（現豊西町）の俳人で明治・大正期に活躍し、多くの門下生を育てました。

浜北区**横須賀の薬王山宝珠寺薬師堂**内に、明治二十五年壬辰（一八九二）の年に奉納された、四十首の俳句額（判者 燕石）が残されています。（上の写真）。

額には寺島の十湖門下生である**「習静（しゅうせい）」（大村幸一郎氏）**の一句が書かれています。

月雪も　詠し窓や　梅かをる　　寺シマ　習静

平成二十二年に豊西町に移転築造された**「十湖百句塚」**に「習静」の句碑があります。

「十湖百句塚」は、元は明治三十九年に大木随處・松島十湖らによって笠井町福来寺に建立され、その後、御殿山さらに法永寺に移転されていました。

９５

散るも花　散らぬも花の　にしきかな　　習静

明治二十九年、豊西町御嶽神社に松島十湖が呼び掛けて建てた**「百人一句塚」**に、「習静」の句碑があります。

４１２

弓はりて　月もまもるか　いねの上　　習静

百人一句塚（上）と大伝寺（下）の知新句碑

４２７

明治二十九年、豊西町御嶽神社に松島十湖が呼び掛けて建てた「百人一句塚」に、「知新」（渥美代助氏）の句碑があります。

初日にも　まさるおもひや　今日の月　　知新

「知新」は大正十一年宗匠となりました。「知新」の句碑は大伝寺にもあります。昭和三十年に十湖の門人たちが建立しました。

「寺島の歴史を探る」その10参照

すら〳〵と　月は昇りて　水の中　　知新居士

４０６

同じく「百人一句塚」に、「月洲」（花井要一郎氏）の句碑があります。

かゝる度　露置袖や　月の雲　　月洲

２２３

同じく「百人一句塚」に、「秋湖」（原田利三郎氏）の句碑があります。

扇にも　のらぬかろみや　散さくら　　秋湖

＊他に松島十湖の門下生には、「涼水」（石神寛三郎氏）がおります。

令和３年１０月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その２９　　作成　７班　太田隆雄

寺島の寺子屋手本

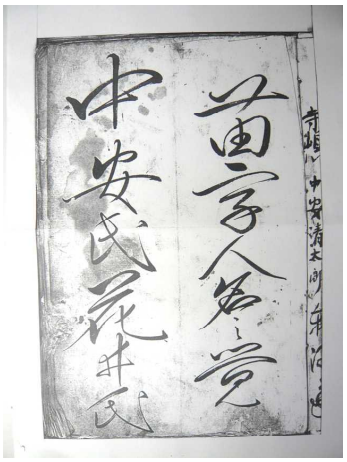
江戸時代の終わり頃から明治の初めに、西隠寺の原田頑翁和尚が師匠となり、子供（筆子）が手習いを受けた時の手本が、中安家と花井家に残されています。手習いをした後、手本をまとめて綴ったもので、表紙には頑翁師匠の表題、裏表紙には子供（筆子）の名前が記されています。

中安家の手本は、文久３年（１８６３）、明治２年、４年～５年、花井家の手本は、明治２年のものです。

中安家の手本の内容は、苗字人名・隣村・四季・十干十二支・方位・時効挨拶・五機七道名・名頭字尽・官名尽・献立・書状・片仮名イロハ歌などで、明治４～５年の手本には、他に清水組の６人の子供の名前があり、毎日自宅に手習いに来ていると、師匠により書かれています。花井家の手本は、「苗字人名之覚」で、中安家とほぼ同じものです。

内容の一つ**「苗字人名之覚」**（１８丁・３６ページ）には、地域毎に人名、職業、寺社、地名などが書かれ、習字の教材というのみならず、村の様子を把握させるものとなっています。私たちも当時の村の様子を知ることのできる資料です。

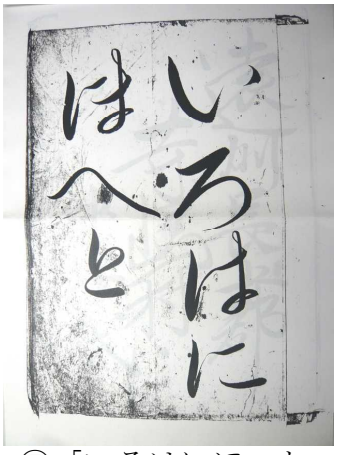
①表紙「恭倹以行礼」



②「苗字人名之覚」

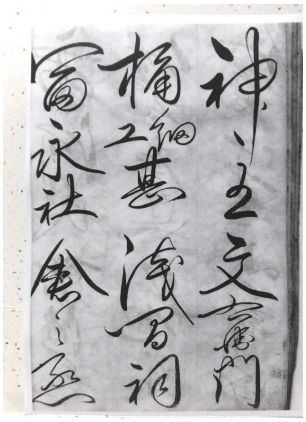
③裏表紙

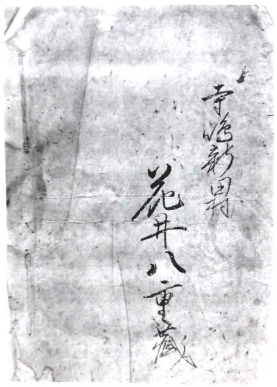
④表紙「学者如登山」



⑤「いろはにほへと」

中安家
①②③　文久３年
④⑤　　明治２年
（市民ミュージアム浜北所蔵）





①「御手本」　　②③「苗字人名之覚」の一部　　④裏表紙

花井家　明治２年　（花井家所蔵）

○文久３年（１８６３）の「苗字人名之覚」一覧　　（中安家）（浜北市史通史上巻より）

例としてあげると、江戸時代終わり頃には、寺島にも様々な職業があることが分かります。職業の後に人名が書かれているようです。

材木屋・穀物屋・酒店屋・風呂や・番人・下役・大工・紺染屋・沙官職・神主・溜屋・生酎屋・小紋絞・造酒屋・畳や・医師・髪結所

（明治２年には、鍋釜屋・借家・唐からしや・桶大工・健順織？も加わっています。）

地名　　寺社等　　職業・役　　高札場

丁数	1			2			3			4			5			6		
文久三年月日	(記事なし)			十一月十二日	戌		十一月十一日	戌		九月十二日	戌		八月十日	亥		十四月十一日	亥	
寺子名	兵東	与		兵清			興			兵子			清太郎			清		け
「苗字人名之覚」	中安氏	喜与次		保五郎			増象			勇治良			袴田氏			椿薬師		坊太郎
	花井氏			冨八			新兵衛			繁熊			伝右衛門			七社		十七蔵
	兵右衛門			弥作			弥平次			浅五郎			美世蔵			権現		半兵衛
	宇右衛門			勘重						久太夫			武助			天神様		藤七
	源兵衛			甚右衛門						伸右衛門			弥惣太			千代蔵		藤市
													銀蔵			秋葉山		
													忠賀象			御燈明		
													弥十			御高札		
																拾王堂		
																材兵衛		
														八百象				
														太右衛門				
														材木屋				
														鶴之助				
								清熊										
								健司										
								長右衛門										
								貞兵衛										

丁数	文久三年 月日	寺子名	「苗字人名之覚」															
7	四月十九日渡し	清け	嘉右衛門	稲八			初次郎		花掛	地蔵様	善之助	御朱印地	松源山	風呂や	安右衛門	理八	穀物屋	酒店屋
7			嘉平次	稲平					西隠寺	御門前	仙次郎	亀千代				角		
8	亥三月廿七日	清太																
8																		
9	亥正月廿六日	清？	弥惣左衛門	泰兵衛	利平	幾象	菊次郎											
9			庄次郎	熊治郎	磯八	番人	下役											
9			半造															
10	亥四月廿八日	清印太	氏神様	御広前	鳥居	御拝殿	兼吉											
10			辨之輔	源馬氏	常右衛門	大工	仙象											
10																		
11 十段	亥四月日	兵清太	佐兵衛	久之進	糊染や	沙官職	治良助											
12			南崎	東光寺	安兵衛	金象	作蔵											
12	ひるから																	
12			清水															
12	五月九日より	清げ	笠み路	往還筋	長富山	大傳寺	茂右衛門											
13		？	彦五良	庄之助	與兵衛													

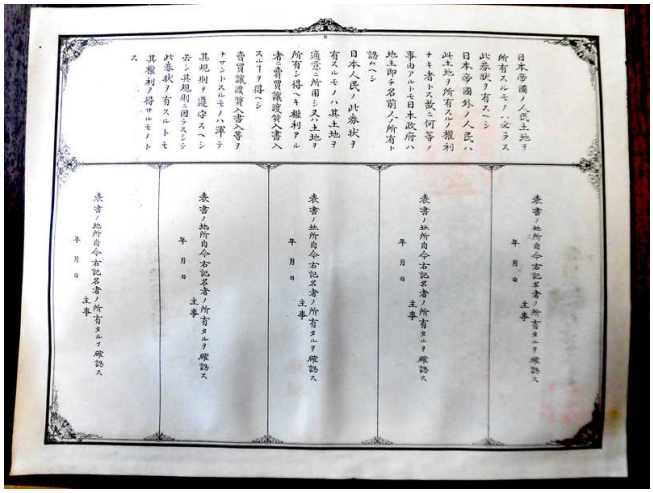
丁数	文久三年 月日	寺子名	「苗字人名之覚」															
13	亥三月日	てひ伴	東新田	森重氏	権兵衛	渥美氏	数太良											
13		兵？	徳右衛門	永安寺	周象													
13		清太郎																
14	亥五月廿四日	清げ	市河氏	弥八	津留吉	お多称	亀吉											
14		太け	定喜知	登美十	北新田	神主	文右衛門											
14		伴	浅間祠	富永社	倉之丞													
15	十亥三月九日	清太郎	花井氏	溜屋	岩栄作	儀平	幸幸											
16		源涼	喜藤治	馬淵氏	勝勝	忠忠	浅隠居											
16			お美え	喜泉庵														
16	四亥六月	清伴	生酎屋	清右衛門	珎象	永五郎	小紋絞											
17			逸平	造酒屋	栄介	畳畳や	清壽計											
17			米蔵	高王様	鎮守													
17																		
18	十亥六月二日	清与	山王	大権現	正宋又	為勇	三郎右衛門											
18		太織	友要	清朴	東市	醫師	伊代蔵											
18		平太	春豊	髪結所	瀧和													

令和３年１１月１日

回覧 「寺島の歴史を探る」その３０　　作成　７班　太田隆雄

明治時代の地券と寺島全村地図

地券（表面）



地券（裏面）

江戸時代の税は、米の収穫高をもとに年貢として領主に納めていましたが、地域毎に違いがありました。

明治政府は、明治６年に地租改正法を公布し、地価をもとに金銭を納める全国統一の税制度を作りました。土地所有者を確認して地券を発行し、土地所有者を納税義務者としました。

地租の税率は、地価の３％としましたが、高額で負担が大きいと反対一揆が起こるなどして、明治１０年に２．５％に改正されました。

左の地券は、東新田の畑の所有者に発行されたもので、明治２２年３月に発行されています。表には畑の面積・地価・地租が書かれ、裏には、土地の所有権や遵守すべきことなどが書かれています。

しかし、土地の面積など不正確な点があり、政府は明治１９年から２１年まで、大規模な地押調査（土地の調査）を行い、新たな土地台帳を作成しました。これにより**明治２２年３月２２日地券制度は廃止**され、**土地台帳による納税**に変わりました。

明治２２年４月１日に寺島村・横須賀村・中条村・高畑村・東美薗村・西美薗村・油一色村・本沢合村が合併し美島村となりました。紹介した地券は、合併前の３月発行ですが、土地の場所は**すでに美島村寺島**としています。しかし、発行された月と同じ月に地券は廃止されています。わずかな日数で土地台帳に変えられてしまった地券です。

次ページの地図は、地押調査の結果を元に作成されたと思われる**「寺島村全村地図壱分一間縮図」**（１／６００）です。**美島村となる前の地図**です。

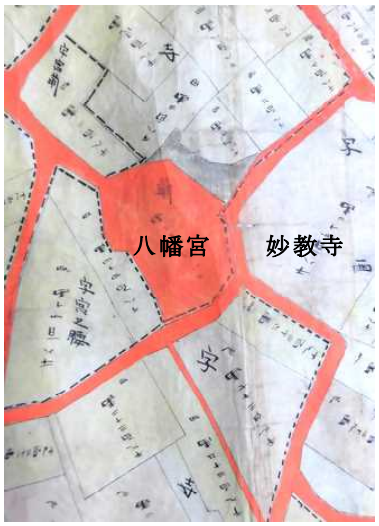
南・中・北の３幅に分けられて作成されています。土地一筆ずつの地番と宅地・耕地・林などの区別が記載されています。また、表題部分に地主総代数名の名があります。**地図の上が南、下が北**になっています。

「寺島村全村地図壱分一間縮図」（１／６００）（上が南）　（袴田鈴夫氏所蔵）

寺島村全村地図（南の部分）

寺島村全村地図（中の部分）

寺島村全村地図（北の部分）



令和３年１２月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その３１　　作成　７班　太田隆雄

青山忠俊と小林・寺島

覚

一三百卅六石八斗四升七合　寺嶋村
一百十七石三合　寺嶋新田村
一百八十三石三斗　石原村
高合六百卅七石一斗五升
右之所高千石之内ニ青山伯耆守ニ被
下候間可被相渡候以上
（一六二六）
寛永三丙寅年閏四月廿四日　播磨○
右衛門□
信濃○
主計□
（老中大炊頭　土井利勝）　大炊○
（幕府代官　秋鹿朝正）
浅井長四郎殿

左の文書は、寛永３年(1626)幕府代官、浅井長四郎（秋鹿朝正)宛に、**寺島村・寺島新田村**・石原村の支配地を、青山伯耆守忠俊に引き渡すように、勘定頭・老中(土井利勝ら)が連署した指令書です。

青山忠俊は、三河国額田郡出身で家康に仕えていた忠成の子として浜松で生まれ、徳川秀忠に仕えました。元和元年(1615)、竹千代（後の家光）の傅（もりやく）となり、同２年老職（老中）となりました。同５年(1619)武蔵国岩槻城主として４万５千石を領し，さらに５万石に加増されました。

同９年(1623)、家光が将軍となりましたが、家光への諫言がもとで勘気を蒙り、所領を削られ蟄居となってしまいました。

忠俊の願いにより、子の宗俊と共に親戚に当たる貴平村の内藤家に１・２年滞在し、**寛永３年（１６２６）**内藤家所有の土地がある小林村に移りました。それで徳川秀忠が惜しんで千石を与えたのです。上の文書は、その時に出されたもので、千石の内に寺島村・寺島新田村が含まれていました。

（参照「寺島の歴史を探る」その２１）

家光が後に忠俊の功を憶い、召喚しようとしましたが、忠俊はそれを辞したといいます。小林村の忠俊の屋敷跡は、言い伝えでは**「椿島」**にあって椿一株があったといいます。

６年後の**寛永９年（１６３２）**、徳川秀忠が薨じて忠俊は許され、弟幸成の領地、相模国今泉村に帰りました。その時、屋敷門を**小林の心宝寺の山門**として寄進したといいます。子の宗俊は小諸城主から大阪城代となり、延宝６年(1678)、浜松城主となりました。

忠俊は、**寛永４年(1627)下小林の八幡宮の社殿**を寄進していますが、ちなみに後の寛文６年(1666)と延宝９年(1681)の棟札には、**寺島の大工大村彦五郎**の名が記されています。

（文書は静岡県史資料編所収）（参考「青山忠俊と小林」北浜村誌、「内藤家由緒書」）

少林山心宝寺の山門

山門の由来

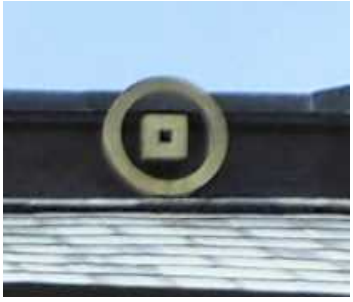
椿島方面

＜「心宝寺誌」より＞

＊忠俊は、蟄居を命ぜられましたが、信仰心が厚く、法号を春室宗信といい、剃髪して僧同様の生活をし､心宝寺の千手観音及び下小林の八幡神社に朝夕参拝をしたといいます。

＊言い伝えとして、鎮守の荒神社の竹藪に一本のタケノコが穴あき銭をもたげて出たのを見て、「土に埋もれた銭さえ世に出ることができる。自分も必ず勘気がとかれる日が来るであろう。」と心に念じ、信仰を深めたといいます。

この因縁によって、心宝寺の紋を穴あき銭として、現在も使われています。



寺紋　穴あき銭

下小林　八幡宮

＜お知らせ＞　令和３年度　浜松地域遺産(認定文化財)申請中

寺島自治会では、本年度、浜松地域遺産に、次の５点を申請中です。認定結果は、３月下旬に発表されます。

半僧坊里程石　4点

五里十五丁

□□□四丁

□□□二丁

五里十□□

中安家の土蔵

詳しくは「寺島の歴史を探る」その７・その１８参照

令和４年１月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その３２　　作成　７班　太田隆雄

寺島領主の陣屋を巡る

秋鹿屋敷跡の扇子池（中泉歴史公園）

○幕府代官　秋鹿氏（あいか）

（磐田市）

戦国時代に家康に仕えた秋鹿（あいか）氏の屋敷は、中泉にあり、家康が鷹狩りの宿舎にもしていましたが、天正６年（1578）家康に献上し、久保村に移りました。

秋鹿氏は関ヶ原の戦い後、幕府代官を務め、遠江国の府八幡宮の神官を兼ねていました。元和５年（1619）からは**１６代朝正（ともまさ）・１７代朝重（ともしげ）**の時、幕府領となった寺島などを治めました。（代官職は１８代道重（みちしげ）まで続きました。）　屋敷（陣屋）跡は、明治以降に劇場や遊郭などが建てられましたが、今は庭園が「扇子池」として残されて、公園となっています。

無量山泉蔵寺（中泉）

秋鹿氏墓所（一番左は１７代朝重）

秋鹿家墓所は菩提寺である**泉蔵寺**にあり、朝正・朝重・道重の五輪塔などが並んでいます。

市野惣太夫屋敷地付近

○幕府代官　市野氏

市野氏は、先祖は浅井氏の一族で、家康に仕え、関ヶ原の戦い後代官となり、市野村（浜松市市野町）に屋敷地を賜わりました。その後、姓を市野に改めました。初代惣太夫真久（さねひさ）（実久）・２代真次（さねつぐ）・３代真利（さねとし）・４代真防（さねあき）まで代官職を受け継ぎました。**３代真利・４代真防**の時、寺島の代官となりました。

屋敷（陣屋）は、宗安寺の南西１００ｍ付近にあったとされていますが、正確な位置は不明です。

萬松山宗安寺

市野氏墓所（一番左は初代真久）

墓所は、初代真久開基の曹洞宗宗安寺にあり、３基の基壇に本家・分家の墓塔が並んでいます。

○旗本　五井松平氏

志都呂陣屋跡（志都呂幼稚園）

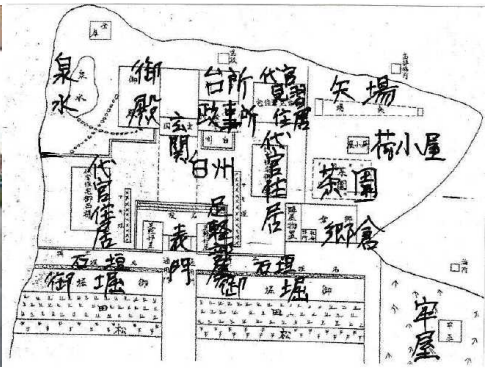
五井松平氏は、松平忠景を祖とし三河国の五井出身で、**１０代忠明**の時、遠江国に知行替えとなり、元禄１６年（1703）には寺島村３村を含めた２３ヶ村を治めました。**志都呂**（浜松市志都呂町）に陣屋を置き、**１７代忠庸**の幕末まで知行が続きました。

陣屋跡は現在、志都呂幼稚園の敷地になっていて、正面の石垣と泉水（池）のみ残されています。

この地は、もとは今川氏の番所があり、江戸時代には今切関所奉行の屋敷がありましたが、忠明の時、陣屋を構えました。

歴代の代官の一人に、歌人として有名な波多完（またき）がおり、国学者や歌人との交流がありました。

陣屋内



陣屋の図

○旗本　北条氏

北条氏は、後（小田原）北条氏の一族で、繁広流の**３代目の氏平**が遠江国内に領地を賜り、元禄１１年（1698）豊田・周知・長上の３郡に移りました。寺島新田村は元禄１６年（1703）より、五井松平氏との相給（分割）で領地となり、**１０代氏和まで**続きました。

陣屋は、**匂坂西**（磐田市富里）に置かれました。現在、畑と住宅地になっています。代官を務めた鈴木家が正林寺跡墓地の東にあります。

陣屋跡付近（匂坂西上集会所南東）

代官鈴木家（正林寺跡の東）

氏和は財政問題と家中混乱で、天保１４年（1843）家事不取締不束（ふつつか）に付き逼塞（ひっそく）を命ぜられ、常陸国へ領地替え、石高も減らされました。

○旗本　松平氏

松平氏は、三河国大河内松平氏の分家です。北条氏の領地替えにより、中泉代官の支配の後、弘化２年より幕末まで**６代正名（まさな）・７代正孝（まさつら）・８代正當（まさあつ）**が五井松平氏と相給で寺島新田村の領主となりました。松平氏は**陣屋を置かず、安間村に詰所**、各村の有力百姓を取締にしました。寺島新田村の取締は誰か不明ですが、庄屋（名主）が務めたと思われます。

＊その他、幕府領中泉代官所については、今回は省きました。

令和４年２月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その３３　　作成　７班　太田隆雄

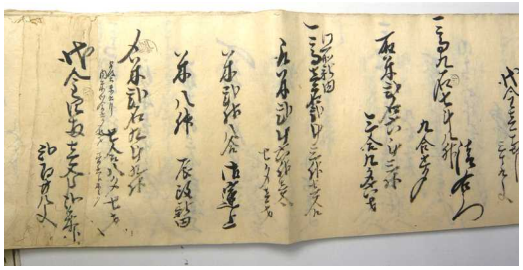
江戸~明治時代の資料等を紹介

○地蔵菩薩

大伝寺前から笠井に通ずる細道を南へ進むと、大村弥平次氏宅の東側に１６０年程前に建てられた**地蔵菩薩**があります。光背の左側に**「安政六未年　願主申年男」**（１８５９）と刻まれています。高さ６０ｃｍ。地蔵は右手に錫杖を持ち、左手に数珠を垂らしています。地蔵菩薩は、地獄・餓鬼・修羅など六道を巡りながら、人々の苦難を身代わりとなって受け、人々を救う仏です。昔、この地蔵は笠井上村の地蔵と二体で呼応して、夜にいつも二体で行ったり来たりしていたという伝説があります。もと北の角あたりにあり、道路改修のために現在地に移したといいます。

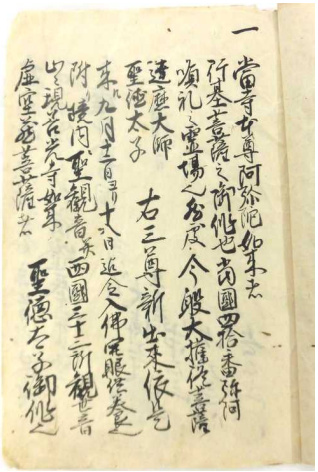
○寺島村の安政５年（１８５８）午御年貢取立帳（中安家文書）

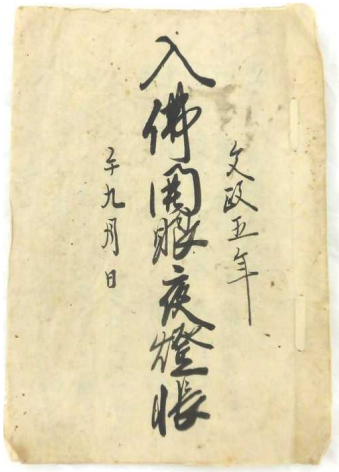
庄屋が領主から徴収を命ぜられた年貢を各戸に割り当てた帳簿です。寺島村(寺島新田村・打上村は除く)の石高と年貢高、各戸の石高と年貢高・年貢代が記されています。寺島村は皆畑の村で、年貢は金納していました。村全体で付加税を含めて米約１１８石分(約１７４両)になります。



取立帳は、元治元年までの６冊、明治２・３年の２冊が残されています。

（「中安清夫家文書」市民ミュージアム浜北所蔵）





○文政５年（１８２２）入仏開眼夜燈帳

大伝寺の大権修利菩薩・達磨大師・聖徳太子像が製作され、９月１２日より１８日まで開眼供養を行うこと、また、そのために夜燈一燈２００文で寄附を願うことが、大伝寺・総代・組頭・庄屋の名で、記されています。

境内には、聖観音・西国三十三観音があることも記されています。

聖観音は現在も再建されて境内にあります。観音堂の西国三十三観音は昭和４６年に本堂に移されていますが、この当時の観音であるかは、不明です。

（浜松市博物館所蔵）

○日清日露戦捷（せんしょう）記念碑と忠魂碑

明治２７~２８年の日清戦争と３７～３８年の日露戦争の勝利を記念した戦捷記念碑（左）と、日露戦争の戦没者等を慰霊する忠魂碑（右）が、**明治４４年９月**、寺島地区の人々により神明宮境内に建立されました。

戦捷記念碑には、従軍した３２名の姓名が記され、忠魂碑には戦没者等６名の姓名（両方とも寺島東を含む）が刻まれています。

忠魂碑の揮毫は、陸軍大将　男爵　大久保春野、石工は松下忠吉です。基壇の周りに多数の寄附人名が刻まれています。毎年の神明宮例大祭の時、自治会主催で慰霊祭が行われています。

○中安家の主屋（清水）

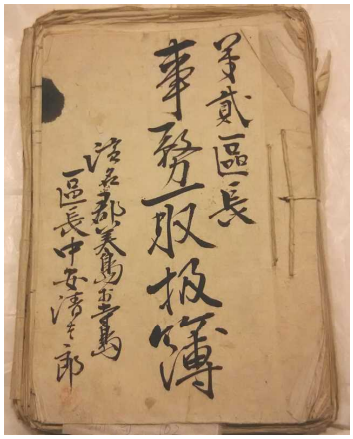
江戸時代に庄屋を務めた中安清右衛門家の分家に当たる中安家の主屋で、１３０年前の**明治２４年建築**の２階建ての建物です。太い梁が組まれています。家人の使う通用口の他に、客人を送迎する**式台玄関**と部屋が設けられています。現在は土間東部分が取り除かれています。

○神社仏閣拝礼供養塔

大伝寺境内に明治３１年に建立された供養塔です。**「奉納西国秩父板東第百番及三十三國神社仏閣拝礼供養塔」「明治卅一年三月建之　當村　中安重太郎」**と刻まれています。

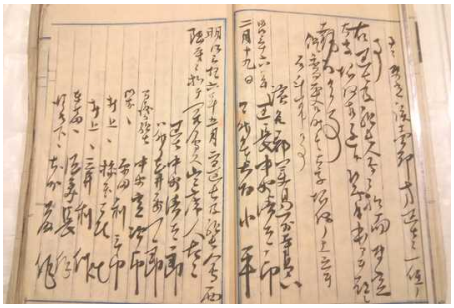
西国３３か所・秩父３４か所・板東３３か所の合わせて１００か所の観音霊場と神社仏閣を巡って参拝した記念に建てられた供養塔です。

中安重太郎氏は、屋号重（◇）と称する太物（綿織物）商を営みました。



○第二区長事務取扱簿（源馬家文書）

明治３６年に書かれた美島村寺島第二区長の中安清太郎の記録簿です。当時は、現在の自治会に当たる会合が西隠寺において開かれ、各組長が出席して寺島の様々な事案について協議されていました。例として袴の着用、神明宮拝殿改築、十王堂跡の売却などについて書かれています。当時の一区長は源馬房次郎でした。



（「源馬家文書」浜松市博物館所蔵）

令和４年３月１日

回覧　「寺島の歴史を探る」その３４　　作成　７班　太田隆雄

遠州織物の歴史

遠州織物が浜松東部、笠井、浜北周辺で盛んに作られ、遠州地方の特産物として全国的に知られていました。その歴史について紹介します。

○江戸時代中期～幕末

江戸時代の中頃から温暖な気候や立地条件に恵まれ、綿花や染料の原材料である藍・紫紺の栽培が盛んになりました。農家では副業として糸紡ぎや機織りをして木綿織物の製造をしました。

やがて賃織りを各農家に委託する事業が起こり，幕末には，人を集めて機を織らせる織屋が誕生し、製品は**笠井の市**などで取引されて**「笠井縞（かさいじま）」**とよばれました。また，木船新田村（貴布祢）の和泉屋木俣家，**寺島の中安清右衛門家**などが問屋業を営み、江戸や大坂へも販路を広げていきました。

笠井縞

江戸時代の終わり頃からは、織機は居座機（いざりばた）から踏み木で綜絖（そうこう）が動く高機（たかはた）に代わり、織物の品質向上と効率のよい生産ができるようになりました。

足踏み機

○明治時代初期～後期

笠井市では浜松や周辺から商人が集まり、**寺島の源馬房次郎（源馬商店）**らの仲買商人も商人や消費者に販売しました。明治時代中期には，中心が浜松に移り、「笠井縞」の名を脱し**「遠州縞」**として全国に知られるようになりました。

織機も、紐（ひも）を引いて横糸の杼（ひ）を飛ばすチャンカラ機が導入され、さらに足踏みだけで綜絖（そうこう）・杼（ひ）・筬（おさ）が動く**足踏み機**によって生産力も向上しました。笠井に来た**水野久平**は、織機の発明改良をし織物産業発展に寄与しました。**（その１２参照）**

モーターの動力織機

○明治時代末期～大正時代

発動機の動力織機が開発され，**豊田式・鈴政式・鈴木式など動力織機が普及し**ました。明治末～大正初めには電力モーターによる織機が作られまし

た。これにより織物生産が盛んになり，多くの織物工場ができました。

明治４５年には、北浜村内にも、会社工場は５、個人営業者は４３にのぼりました。また、第一次世界大戦（大正３～７年）の影響で輸出向けの広幅織物も本格化し，織物産業は好景気に沸きました。大正１０年には、北浜村の織物製造業者は９１と２倍にもなりました。大正１５年には、木俣千代八により貴布祢に日清紡績浜松工場が誘致されています。

○昭和初期～２０年代初期

昭和１２年頃には織物生産額も最高になり，織機の生産高も全国第２位になりました。寺島の山庄、大村庄治氏もこの頃創業しました。

しかし，第二次世界大戦中，織物工場が軍事産業へ転換させられたり，織機を供出したり空襲を受けたりして、遠州織物産業は大きな打撃を受けました。

寺島の山庄(昭和３０年代)　昭和１２年頃操業

○昭和２０年代中頃～３０年代

戦後，朝鮮戦争特需により**「ガチャ万景気（織機がガチャっと動くたびに一万円儲かる)」**とも呼ばれる好景気をむかえました。この機会に新設された織屋も数多くありました。浜北では、昭和２６年～３０年に６０軒が創立されました。

○昭和４０年代以降

昭和４０年代になると、安い海外製品により，国内外の市場を奪われ，転業・廃業する工場が多くなりました。浜北の織屋は昭和５０年には７０２軒でしたが、オイルショック後の昭和５６年には、３５５軒と、５・６年で半減しました。山庄は、平成１４年頃に廃業しました。

山庄の織物工場　４棟の内２棟が残る

そのような中で生き残った工場は，高付加価値の新製品を送り出し，遠州織物の品質の向上に務めています。

（参考　「浜松市史三」「浜北市史通史下巻」「伎倍第十号」「遠江織物史稿」ほか）

＜お知らせ＞　平成３０年１１月から「寺島の歴史を探る」の回覧をさせていただきました。毎回お読みいただき、ありがとうございます。これまでの回覧を寺島自治会が冊子にまとめました。公会堂や協働センターにも常備してありますので、是非お読みいただきたいと思います。

「寺島の歴史を探る」

執筆　　太田隆雄（寺島７班）
TEL　053-587-3063
発行　　令和４年３月１日
令和４年８月１日一部改訂
浜松市浜北区寺島自治会